長崎県文化財調査報告書　第33集

金石城跡緊急発掘調査報告書

1977

長崎県教育委員会

序

対馬にかねてからの念願であった「対馬歴史民俗資料館」が文化庁の補助を受けて、昭和52年４月から正式発足することになりました。

資料館は、対馬藩・宗氏十万石のかつての居城であった「金石城」城内に建設されることになったため、緊急発掘調査を実施し、その調査結果をここに刊行することになりました。

今回の調査で金石城の遺構およびその実態のごく一部が判明したに過ぎません。これを契機として機会ある度に調査し、また各分野からの協力を得て、資料を集積していくことが私達に課せられた問題解決の第一歩であり使命であるといえるでしょう。

そういった意味で本報告書が、学術・教育・文化財の保護・郷土史研究の資料として広く一般の活用に供されれば望外の喜びです。

発刊にあたり種々の御協力をいただきました関係者各位に深く感謝いたします。

昭和52年３月31日

長崎県教育長　三　村　長　年

凡　例

1．この報告書は、対馬歴史民俗資料館建設事業の一環として実施した緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、国庫補助を受けて長崎県文化課が実施した。

3．調査期日

試掘調査　昭和51年1月26日～2月6日　12日間

発掘調査　昭和51年4月12日～6月14日　64日間

4．調 査 員

文 化 課　文化財保護主事　田川　肇、同・副島和明

5．執筆者名は、それぞれ各項末尾に記し、遺物の実測・製図は執筆者の責任において行った。製図については溝口美津代の助力を得た。

6．写真撮影は副島が担当した。

7．本遺跡より出土した遺物はすべて長崎県教育委員会が保管している。

8．周辺地形図は長崎県建築課で作成したものを使用した。

9．「府内見取絵図」は蓄建令美（じげたてれいじ）氏の所有で、写真撮影は厳原町中央公民館・平井清美公民館主事による。

10. 挿図・図版等の縮尺は、特に記載してない限り⅔である。

11. 本書の編集は調査員の責任において行った。

12. 調査協力者（敬称略）

阿比留嘉博（文化財保護指導委員）・永留久恵（同）・三浦忠和（対馬教育事務所社会教育主事補）阿比留久義（前対馬教育事務所社会教育主事補）・永瀬正和（厳原町教育委員会事務局局長補佐）・箱崎政幸（同主事）・佐々木松三（ビジターセンター）・対馬高校郷土部・竹村　正（郷土史家）

（全般協力）長崎県建築課・同対馬支庁建設課・同対馬教育事務所・厳原町・同教育委員会事務局・ビジターセンター・下県郡森林組合・国分寺

13. 整理協力者

福田康平・溝口美津代・村山由美・魚下雅子・望月泰子・御厨洋子

中島　宏（陶芸研究家）

本　文　目　次

序
凡　　例
挿図目次
図版目次

Ⅰ　位置・環境 …… 1
　1　地理的環境 …… 1
　2　歴史的環境 …… 2
Ⅱ　調査経過 …… 3
Ⅲ　遺　　構 …… 6
Ⅳ　遺　　物 …… 15
　1　磁器 …… 15
　2　陶器 …… 21
　3　瓦 …… 24
　4　金属製品類 …… 25
　5　骨製品 …… 28
Ⅴ　概　　括 …… 28

挿図目次

Fig 1　位置図及び周辺地形図
Fig 2　グリッド配置図
Fig 3　遺構配置図
Fig 4　石垣Bとその周辺遺構
Fig 5　カマドA・B
Fig 6　石垣E
Fig 7　A側溝（部分）
Fig 8　石垣Aとその周辺遺構
Fig 9　碗（1）
Fig10　碗（2）、鉢
Fig11　仏具その他
Fig12　壺
Fig13　陶器（1）
Fig14　陶器（2）
Fig15　瓦
Fig16　金属製品類（1）
Fig17　金属製品類（2）
Fig18　骨製品
Fig19　対馬藩領地図（寛永期）

図版目次

PL 1　遺跡遠景（南より北）
PL 2　清水山（二ノ丸）より厳原港を望む
PL 3　府内見取絵図
PL 4　調査区全域（東より）
PL 5　石垣Aとその周辺遺構（北より）
PL 6　A側溝（暗渠部分）東より
PL 7　D側溝と礎石（西南より）
PL 8　石垣Bとその周辺遺構（南より）
PL 9　B側溝と石垣B（西より）
PL10　石垣B・C・D（西より）
PL11　石垣Dと埋土（北より）
PL12　石垣C（北より）
PL13　カマドA・Bと石垣B（西より）
PL14　カマドA・B
PL15　カマドA（焚口部分）
PL16　碗
PL17　鉢その他
PL18　皿
PL19　壺その他
PL20　銘款
PL21　陶器類
PL22　鉄滓（1）
PL23　鉄滓・鋳型（2）
PL24　金属製品類
PL25　骨製品

Ⅰ　位置・環境

1．地理的環境

対馬は古代より朝鮮半島、対馬、壱岐、九州本土と結ぶ線上に位置し、歴史的にも重要な役割をしめている。南北に細長く、２島横たわり、上、下県郡の２郡６町から成っている。遺跡は下県郡厳原町今屋敷に所在している。厳原町は対馬↔博多間の海上交通、空路の対馬における表玄関でもある。

対馬の基盤層は対馬層群と呼ばれ、5000m以上の厚い地層の第三紀層から構成され、頁岩と砂岩の互層を主とする地層群に貫入した火成岩（黒雲母花崗岩、石英斑岩、流紋岩等）から成っている。[註1] 厳原町付近では頁岩、細砂岩を主とし、岩質は厳原川の西側は急角度で東に傾斜する緻密な黒色のホルフェルス化の進んだ累層で、東側下部にもホルフェルス化が見られ、上部は軟質濃褐色の薄層状を呈す泥質頁岩で占められるとされる。

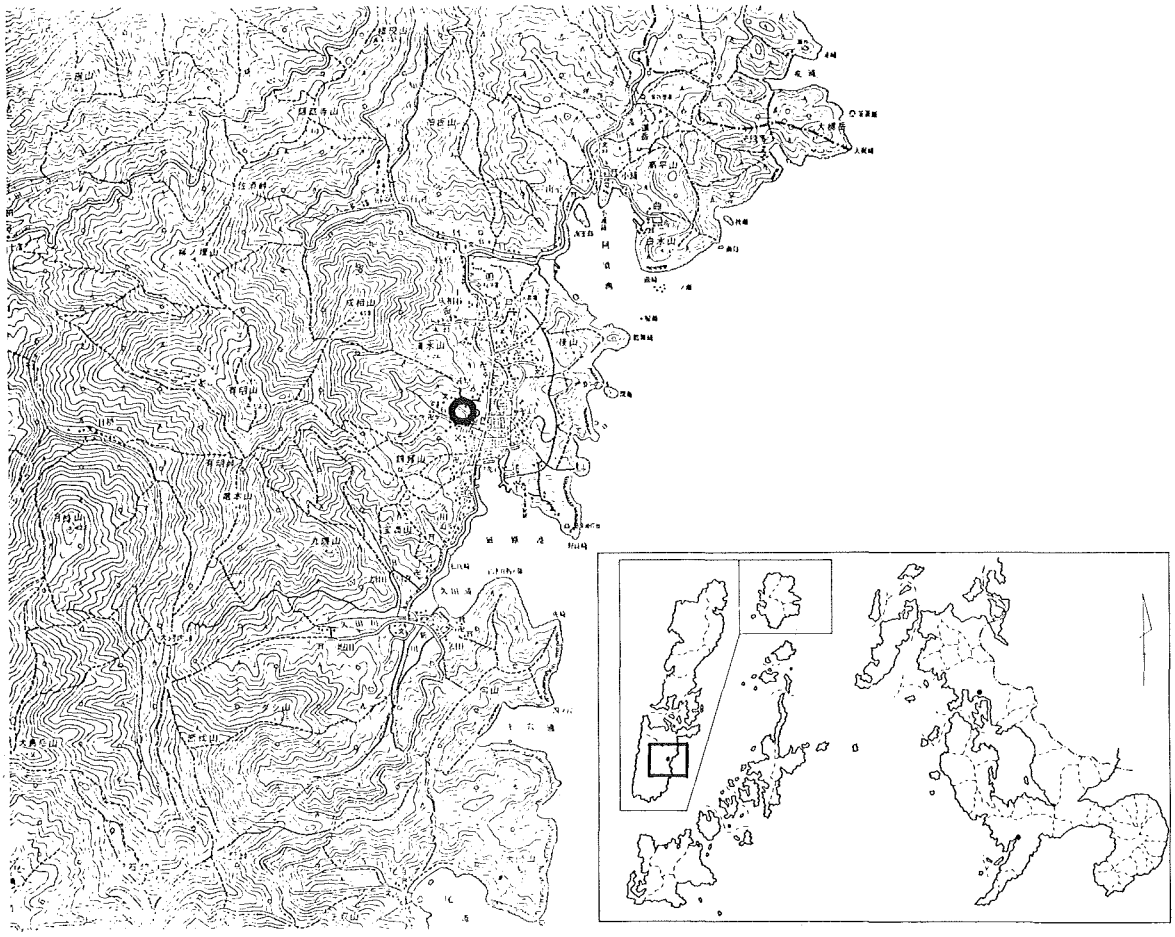


Fig 1 位置図及び周辺地形図

厳原港より入航すると右手に立亀岩と呼ばれる石英斑岩の海食崖である岩塊が見え、左手は高い山並が連なり、町並は河川の形成した沖積地に細長く北に延びている。その町並の西側に成相山、清水山と、有明山、鶴翼山の谷部に金石川が流れ、川添の北側に宗家の屋形が造られたのが1528年で、その後1669年に改修されて金石城と呼ばれ、当時の池、城壁が残っている。その谷間奥に宗家の菩提寺である万松院が建てられ、現在も残っている。

今回調査地点は金石城内の東側に位置し、清火山[註2]の尾根状に延びきった丘陵の裾の南側に当り、現在その北側に対馬ビジターセンター、南側石垣面下に幼稚園が建ち、調査地点は明治初期には旧陸軍要地、旧商工会議所として利用され現在に至る。参考までに安永元年（1772年）当時の城下について記した長崎奉行の調査報告書[註3]がある。

一　府中者対馬国南東之端にて湊口打開き、荒津にて十町計入、波戸矢来石積有之、船付町家に而上陸仕、五六町過家老其外武家屋敷、城之大手西之山方に相見、国主之屋形者十五六町も登り、別所に而阿川浦江山手を相越、侍屋敷町家共凡惣長二十町計、雙方山岸に而幅五六町も有之候、川二筋流れ、場狭之所に御座候、市中町数二十六町有之、　（副　島）

註1．「厳原町北部地域の白土ならびに陶石鉱床」須崎祐吉、矢嶋澄策、堤貞夫、国立科学博物館報(3) 1970　地質と鉱床の部分を一部引用させていただいた。

註2．朝鮮式山城跡で、肥前の名護屋、壱岐の勝本、清水山、上対馬の撃方山を結ぶ兵站線の駅城で、本丸、二ノ丸と文禄頃の石垣が残っている。

註3．通航一覧 132、長崎県史　藩政編より引用。

2．歴史的環境

対馬が古くから大陸文化導入の１基点となっていたことは、地理的・考古学的にみても周知された事実である。文献として登場する最古の記録は魏志倭人伝である。この頃すでに海を渡って大陸まで出かけていた。

369年大和朝廷は、朝鮮半島の南端を支配し、以来 562年に任那の日本府が滅びるまで、植民地確保のため、対馬を足がかりとして度々出兵している。朝鮮植民地の経営が失敗するや、天智天皇３年（ 664年）に筑紫と壱岐、対馬に防人を置き、同６年（ 677年）（現在の下県郡美津島町黒瀬）に金田城を築き防備を固めている。また、天武天皇５年（ 667年）（現在の厳原町）に「国府」を置き、更に島分寺を建立する。〔島分寺は途中で廃絶するのだが、宗氏10代の宗貞国が文明３年（1471年）に再興させる。それが現在ある国分寺へと移行してきたのであって、当時の国分寺とは何の関係もない。〕このことは、単に大陸や朝鮮に対する示威行為であったばかりでなく、貿易に主眼を置いていたのであろう。

一体に対馬島内には良田がなく、最大の経済基盤は何といっても朝鮮との貿易であり、はるかにこれに依存していた。鎌倉時代初期に入国してきた宗氏も藩政を奉還するまで財政の基盤を貿易に置いていた。このことは、豊臣秀吉が国内を統一し朝鮮に出兵し敗北した時も、度重

なる出兵で窮乏した藩財政をたて直そうと何とか朝鮮貿易を再開しょうと努力しているし、江戸幕府と朝鮮との間がうまく行かなくなった時でも偽国書を送ったりしていることでもわかる。

宗氏が対馬を統治するようになったのは鎌倉初期からで、その統治方法は一族に分治させ、血縁関係を中核とした中央集権的支配体制を確立していったのである。その居城は、4代宗盛国が仁位に館を築いてから志多賀、佐賀へ移り、文明18年（1486年）宗貞国は厳原中村に館を移す。(中村館）以後13代盛長まで40年間居住する。大永6年（1526年）14代将盛は池に館を移し2年間居住する。(池の館）宗盛治の乱後、享禄元年（1528年）館を金石に移す。(金石城）この頃はまだ城としての規模、機構ではなかったようで、城と呼ばれるようになったのは寛文9年（1669年）21代義真の時代であり、厳原が城下町としての機能が完成したのも彼の時代である。金石城は延宝6年（1679年）に桟原に館が移されるまで（桟原館） 151年間居住した。現存する城壁、大手門などは、寛文9年（1669年）に造られたといわれている。櫓は大正8年（1919年）まで現存したという。

藩体制が強化されていった背景としては、寛永13年（1636年）領内の総検地を行い、領地の明細な把握をし、中世以降止絶えていた銀山の開発に力を注ぎ、万治2年（1659年）の大火後、城下町の新形成をはかり、家臣団の城下町集住を行うなど行政機構を整備していった。同時に、商業の統制を行い、農村においては均田化政策を遂行し統制を進め、人口調査も行った。

しかし、主力はやはり朝鮮貿易の強化で、貿易による豊富な財源を背景として、寛文11年（1671年）それまでの2万石格から一気に10万石格の大名へと躍進した。このように、対馬藩の財政の確立・藩体制の確立は朝鮮貿易の活況に起因していたといえよう。　　（田　川）

Ⅱ　調査経過

調査に至るまで

対馬は位置的・歴史的にみても中国大陸、朝鮮半島に近く、古くから文化伝播の飛石としての役割りを果たしてきたことは、周知のとおり発見される遺跡や遺物等により顕著である。

また、自然環境、風俗、習慣、民俗資料等の保存度も高く、これらを総合的に保護・保存し、そして研究・展示するための博物館施設の建設がかねてより提唱されていた。

こうした状況の中で、各県に歴史民俗資料館建設を促進してきた文化庁の指導を得て、昭和51年度に国庫補助を受けて厳原町に「対馬歴史民俗資料館」を建設することになった。建設予定地は、ビジターセンター、郷土館が併立する区域で厳原町商工会跡地と決定したが、対馬藩主・宗氏のかっての居城「金石城」城内であるため、工事着工前に発掘調査の必要があるか否かの資料を得るため、急拠、昭和50年度末に試掘調査を実施することとなった。

試掘調査〔昭和51年1月26日（月）～2月6日（金）12日間〕

資料館建設予定地には、試掘調査開始直前まで建っていた建物の基礎が残存していたため、

規制を受けたような格好で調査区を設定した。最終的に、Aトレンチ（1.5m×12m）、Bトレンチ（1.5m×8m）、Cトレンチ（1.5m×6m）、D・E・Fトレンチ（2m×2m）の計55㎡を調査した。

Aトレンチ中央部に自然石で野積んだ幅約50cm、深さ約50cmの側溝が北西から東南に走っているのを確認したので、延長をみるため新たにD・Fトレンチを設定した。また、Cトレンチには石垣に附随した側溝を検出したので、更にFトレンチを設定し、相互関係の確認を行った。

その結果、Aトレンチ内の側溝はDトレンチから更にBトレンチまで延び、Fトレンチで南西に弯曲してそのまま走る。Cトレンチ内の石垣と側溝はEトレンチには出てこないので途中で弯曲してしまう。また、これらの遺構の他にまだ埋没している遺構があると考え、全面的に発掘調査を実施すべく埋め戻して遺構を保存して試掘調査を終了した。

緊急発掘調査〔昭和51年4月12日（月）～6月14日（月）64日間〕

試掘調査の結果に基づき、まず大形ユンボを使い調査対象区域内に残存する建物の基礎と表土を除去する。その後、DトレンチのA側溝を一部掘り出し、これを基準として調査対象区域全域を5m×5mのグリッドに区分し、南北にA・B・C、東西に1・2・3……8とそれぞれ番号を附した。（Fig 2）

調査は、A側溝とB側溝（石垣を含む）の再確認から始め、4月下旬から5月上旬にかけてほぼ遺構の全貌が判明した。（Fig 3）また、試掘調査時からその埋め土の状況から一度に埋められたものと考えていたが、調査が進むにつれて何度かの改築により現在の様な城の形態をとっていったことも判明した。遺物はその埋め土の中に瓦礫と混在していた。

調査目的のひとつである建築物遺構の検出も思うにまかせず、目新しい事象もない日日が続く。5月7日（金）厳原警察署前の町道で電話線埋設工事中に正徳小判等28枚が発見され話題となる。附記しておく。

B石垣に隣接して検出されたカマドは、その後の精査で2基並列しており、しかも1基はB側溝、C石垣によって破壊されているので相互間の新旧関係は明瞭であるが、各遺構の性格、範囲については不明な点が多いので検討が続く。

5月下旬から6月上旬にかけて雨が多くなり、現場作業中止の日が増える。また、調査終了日近くになってKC－1区に新しく石垣を検出し、実測に追われる。調査期間を延長し、早朝からと雨をついての実測であった。折りしも刀剣登録審査会で来島した高野晋司君の協力を得る。

検出した遺構は極力壊さずに工事にかかることを再確認して調査を終了する。調査期間中に多くの町民の見学や対馬高校郷土部の調査参加は、文化財に対する認識を新たにしたようで大変有意義であった。

（田　川）

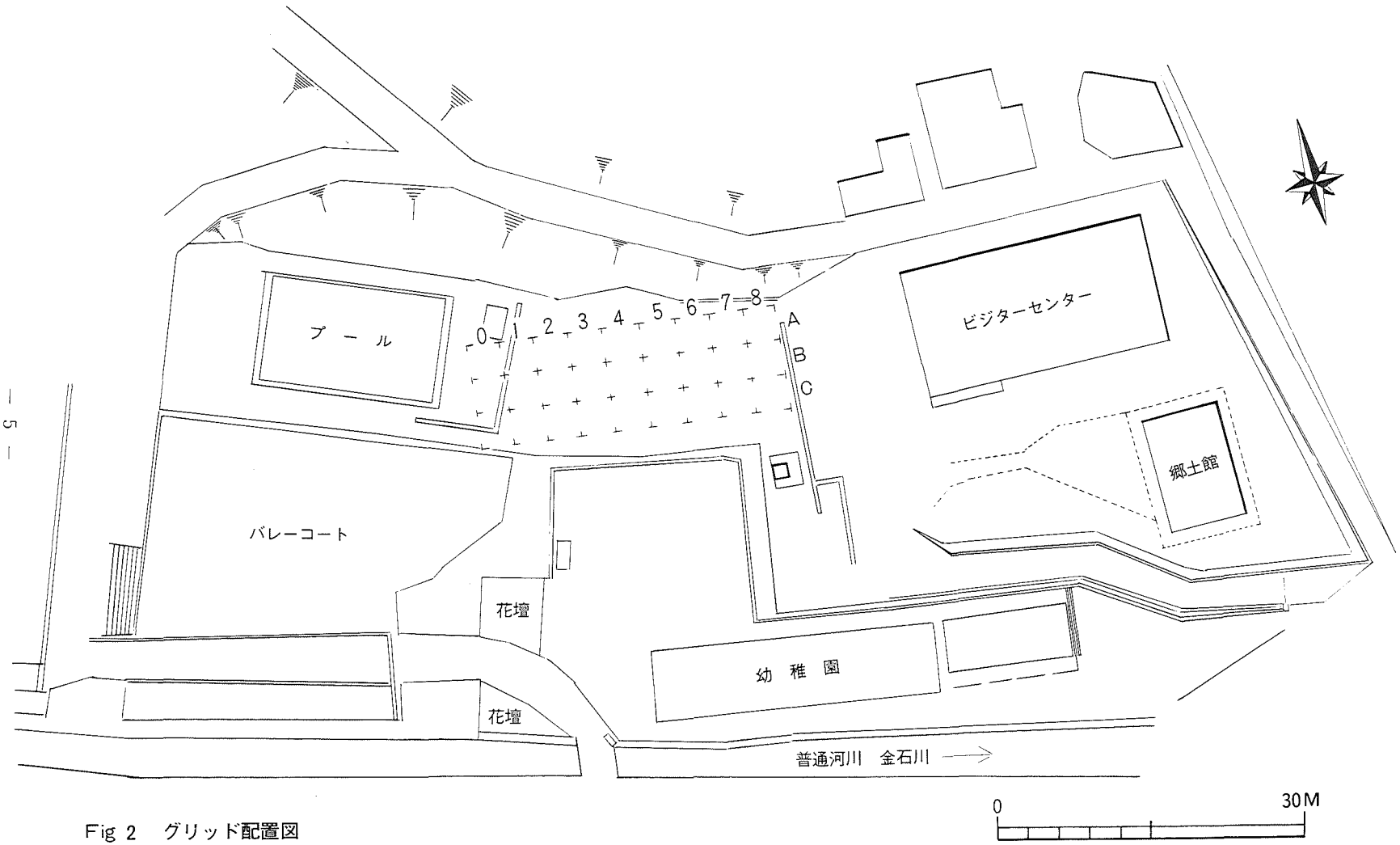


Fig 2　グリッド配置図

Ⅲ　遺　構（Fig 3，PL 4）

膨大な対馬藩宗家の古文書は現在も組織的に解読作業が進められているが、今回発掘調査地点について詳細に記した古文書については明らかでないので、検出遺構より考えてみたい。

検出遺構の築造時期について、少くとも３段階に分けられ利用されたものと考えられる。1669年（寛文九年）宗義真が城郭を改修した、その城郭が金石城として現在残っている。発掘調査地の南側にも当時の石垣があり、それに添って石垣（Ｃ・Ｄ）が検出された。寛文期の改修以前の城域の石垣として築かれたものではなかろうか。その他関連遺構は不明である。(段階Ⅰ)。

石垣(C.D)を部分的に壊わし石垣Ｂを築き、その石垣西側壁面を利用して２基のカマドが構築・使用された段階で、石垣Ｂの東側で鉄滓と炭化物が一面に検出された。このことは鉄滓の科学的分折がなされていないので検討を要するが、鍛冶場を中心にした生活環境の関連遺構として、石垣、カマド等は考えられる。又、石垣Ｂの西側にＢ側溝が築かれ、結果的にカマドＢが壊われたものと考えられる。(段階Ⅱ)

調査地点南側の石垣に平行するようにＡ側溝が走っている。Ａ側溝は西→東→南へと約40m程で、側溝の曲角に大きな板石を利用して暗渠化し、その上に石垣Ａを築く。西際には５個の配石（礎石）があり、Ｄ側溝、東側にはＥ側溝を設置している。又、西側の石垣Ｂ上に約50cm程積石し、Ｂ側溝の片方積石に約70cm程上積して石垣Ｂ面と同じレベルに揃え、Ｃ側溝がＢ側溝に流れ込むようになっている。石垣Ａ、Ｂ間は約32mあり、Ａ側溝との空間は約320m²程で、その空間利用が考えられるが、その部分における遺構等は検出出来なかった。しかし建物の礎石と考えられる配石等があり、建築物の存在も考えられるが詳細は明らかでない。(段階Ⅲ)

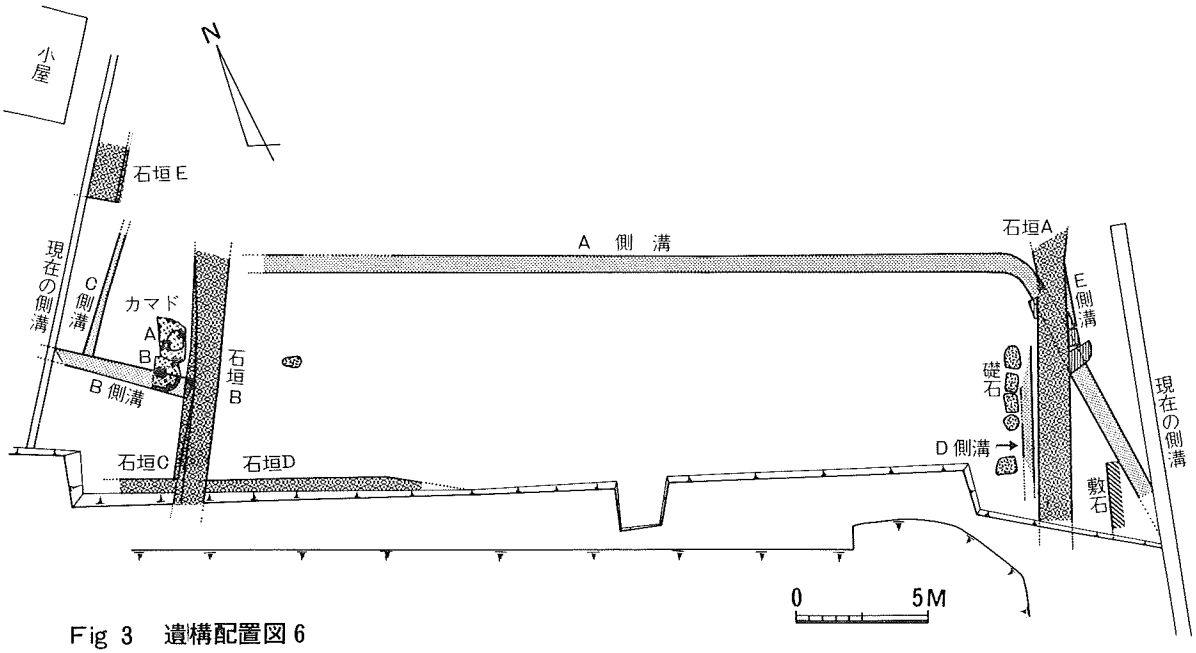


Fig 3　遺構配置図６

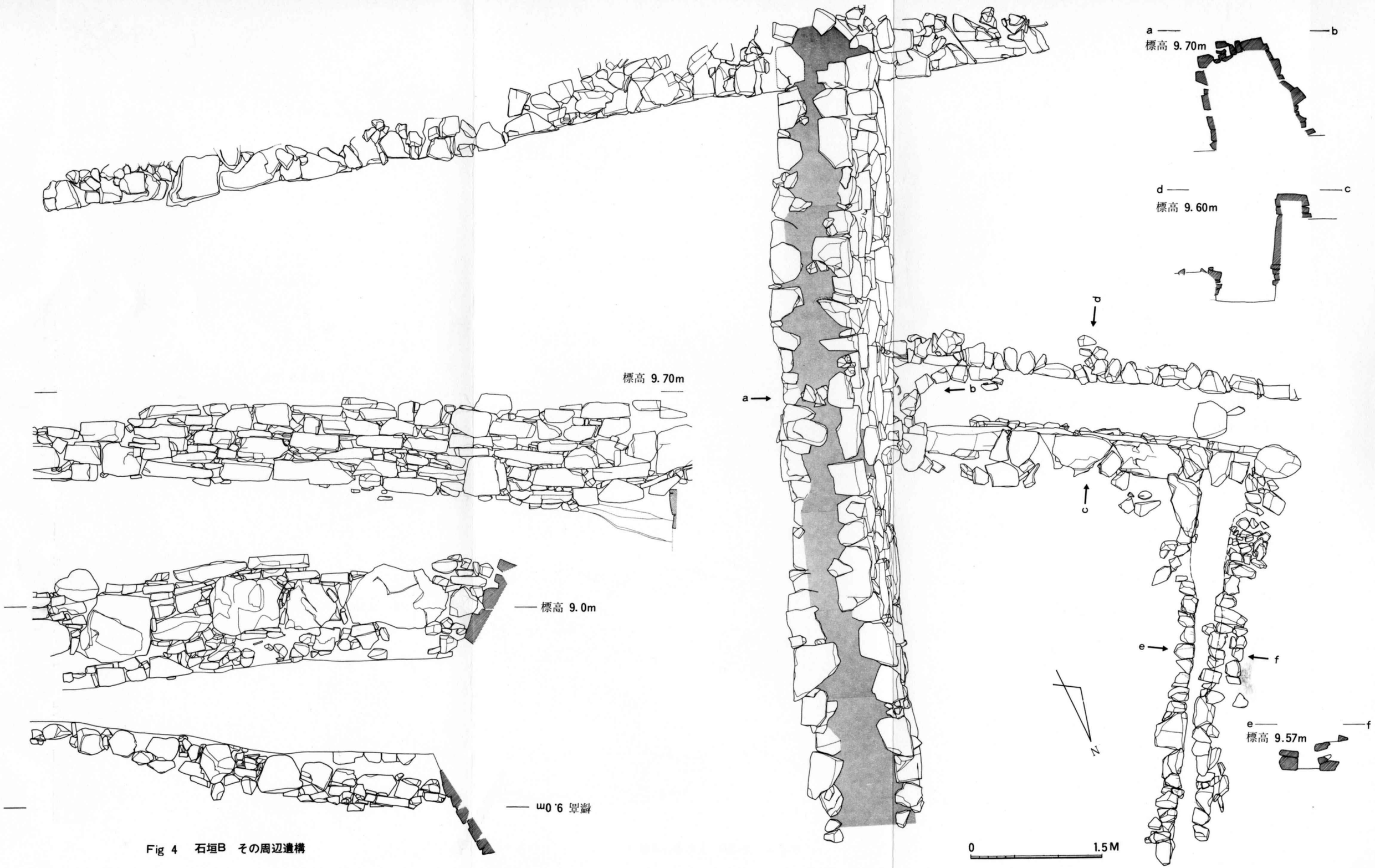


Fig 4　石垣B　その周辺遺構

又、A側溝の北側については、清水山の山麓が尾根状にのびきった山裾が背後にあり、利用空間が狭く、今回トレンチを入れたが遺構の検出はなかった。一方北西側については石垣BとA側溝の西端部分が破壊されているが、その部分より北側は、側溝面より礫層が約2m程堆積する。その礫層中にはサザエのガラ、魚骨等と共に陶磁器類が大量に出土した。それは塵芥捨場的な状況が窺われる。

石垣C．D（Fig 4，PL 10）

石垣C．Dは連続した石垣と考えられるが、積石の築き方が異っている為に一応CとDに分ける。石垣Cの西側は壊わされ、東は石垣B下で現長約2m、根石よりの高さは約1mで地山を切り込み、約30度の傾斜を付け積石を行っている。石垣Dは現長約9mで、西端は石垣B下で、東端は一担曲り未堀部分へ延びる。白黄色砂質土層（地山）を切り込み、平担に積石され、垂直に近い角度で石面を内側（北東方向）に整え、石垣の高さは約80cm程である。

石垣B（Fig 4，PL 8）

石垣Bは石垣C.Dと直交するように築き、南端部において、その石垣の上部積石を壊し、その上に乗せ築いている。更に南へ延びるものと考えられる。北端部分は破壊され、根石部分が若干残る程度であり、A側溝との関係についても不明である。石垣Bは積石の構築状況、および他の遺構との関係上、時間的隔たりは明確でないが、2つの時期に渡り利用されている。

石垣Bは北東から南西方向に延び現長約9.5m。石垣上面の巾（根石部分巾)は南端部で0.8m（1.0m)、中央部で0.8m(1.2m)、北端部(1.3m)で、高さはB側溝併設面で約1.0mである。石垣は東側に傾斜した状態で検出され、東側の上端部より約40～50cmの部分は調査中棒でささえを行いながら作業を行った程である。又、石垣の西側面において、東側と同様に石垣上端部より約50cm程（標高8.70m程）の高さで一担段差が付いている。最大巾約30cmで、特に石垣の南端部分に顕著に見られる。このことは先に述べたように石垣自体の傾斜も考えられるが、明らかに後積し、上乗せした状況が考えられる。この上乗せ積石を行った段階については、B側溝の北側積石を上乗せして現石垣Bと同一レベルにしたこと、および石垣A、側溝の利用時期と考えられる。石垣Bの石材は頁岩、流紋岩、砂岩を使っている。

カマド（Fig 5，PL 13～15）

側溝検出の際にB側溝底面に半円状に配石がみられ、その石が全て焼けている状況が認められた。又、石垣Bの根石部分を出す作業過程でカマドAが検出され、その結果上記の配石がカマドBであることが確認された。カマドA、Bは、石垣Bの西側面を利用して地山（白黄色砂質土層）を切り込み、2基並接して築かれている。その為石垣Bの根石部分より一段低く位置し、このことはカマドを築く段階で、地形的に調査区の地山は東から西へ、北東から西南方向に傾斜しているのと無関係でなく、設置面を平担にしたことと、石垣Bの上積する前段階の石垣高とカマド高、および使用される鉄器類の高さを考慮して築かれたものと考えられる。又石垣Bの根石部分に若干焼けた痕跡と煤の付着が見られる。カマドと石垣Bとの時間的偏たりはないものと考えられる。

カマドA

東側上端部が一部壊われているが、ほぼ完全な形で検出された。焚口は西向きで、規模は東西に1.2m、南北1.7mで、カマド高は60cm程、カマド内の上面観は60×80cmの楕円形状を呈し、底面も同様で円筒状を呈している。地山を約5～20cm程切り込み、平担にして頁岩、流紋岩質の比較的小礫を用い、粘土にて固定しながら積石を行っている。焚口部分の片方は小口積みで、他方は一枚石を用い、底面の間口が巾広になり、前面に一枚石の立石の在った痕跡が残ってい

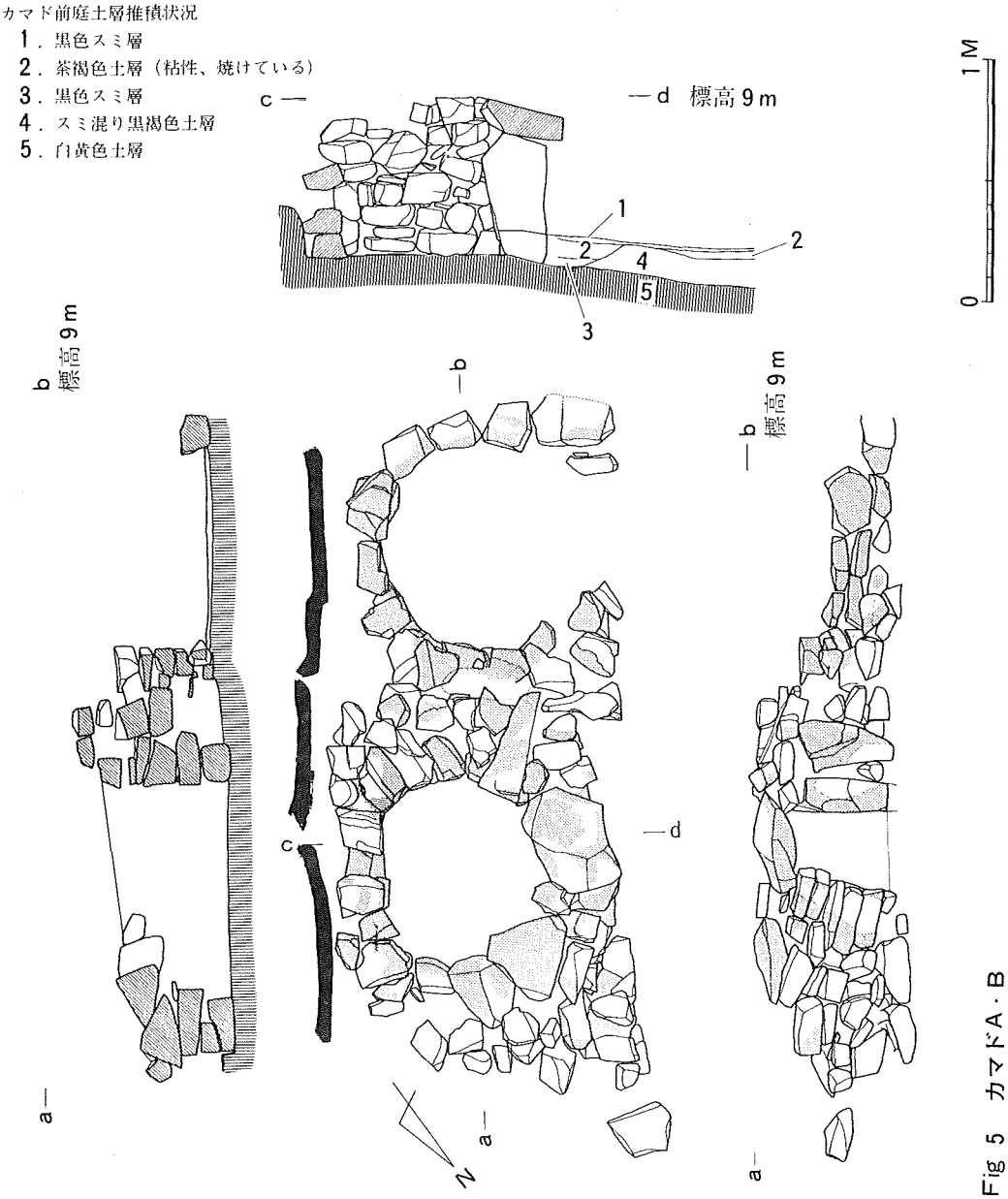


Fig 5 カマドA・B

る。カマド全面に渡り焼け、煤の付着が見られ、カマドの前庭には炭化物が約15cm程、B側溝西端においては約30cm程の堆積状況がみられる。ただ、カマドAについて（Bも同様であろう）煙突部分がみられないことである。このことは屋外に付設されたのであろう。カマドA内よりきせるの雁首一本出土。

カマドB

カマドAの南側に併設され、同時に築かれた状態が認められる。上端部は壊わされ、南側半分は根石部分のみ残っている。2基が接する部分は粘土にて固定され、Aと同様に煤の付着と焼けた状況が見られる。焚口は西向きで、底面経は約80×80cmの半円状を呈しているが、カマドAと同規模と考えられる。

B側溝（Fig 4, PL 9）

B側溝は石垣Bの西側に位置し、直交するように石垣Bの中程の西側面部より、東から西へと、流路の側溝として築かれている。これも石垣Bと同様な状況によると考えられるが、2時期に渡り利用されている。

B側溝は現長約4.5mで、側溝上巾（下巾）が約0.75m（0.65m）で、西端部分で若干狭くなり、西へ急傾斜を持ち現在のプールの下へ更に延びるようである。側溝両積石は南側が約40～50cmで、北側は約1m程あり上積状況が見られる。それは南側と同様に約40～50cmの粗い積石が築かれ、側溝として利用され、後にその北側に板状巨石を乗せ上積し、石垣Bと同レベルにしたものと考えられる。又側溝構築の際に、カマドBを壊わし上に築かれ、側溝底面には炭化物が堆積し、その傾斜は地形に則くした為である。

C側溝（Fig 4, PL 8）

現長約5m、巾約0.25～0.4mで北端は破壊されている。積石は3段積で、側溝の深さは約20cm程である。なだらかな傾斜を持ちB側溝に流れ込んでいる。

石垣E（Fig 6, PL 5）

現長約2m、巾1mで、北と西側へ更に延びるようだ。高さは約80cmで、南側は壊わされて低くなり、積石は板状の砂岩を多く使用し、垂直に近い角度で石面を東側にそろえている。この石垣の利用方、および性格等は不明で、他の遺構との関係についても、接点部分が同様に破壊されて不明である。

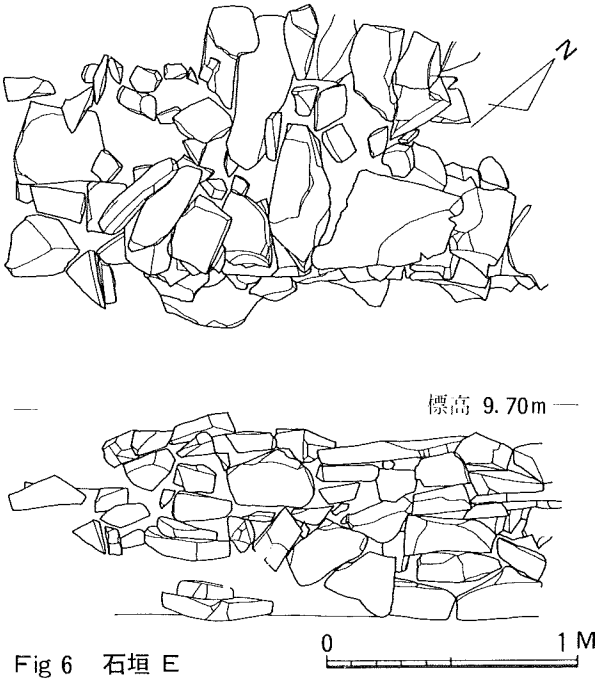


Fig 6　石垣 E

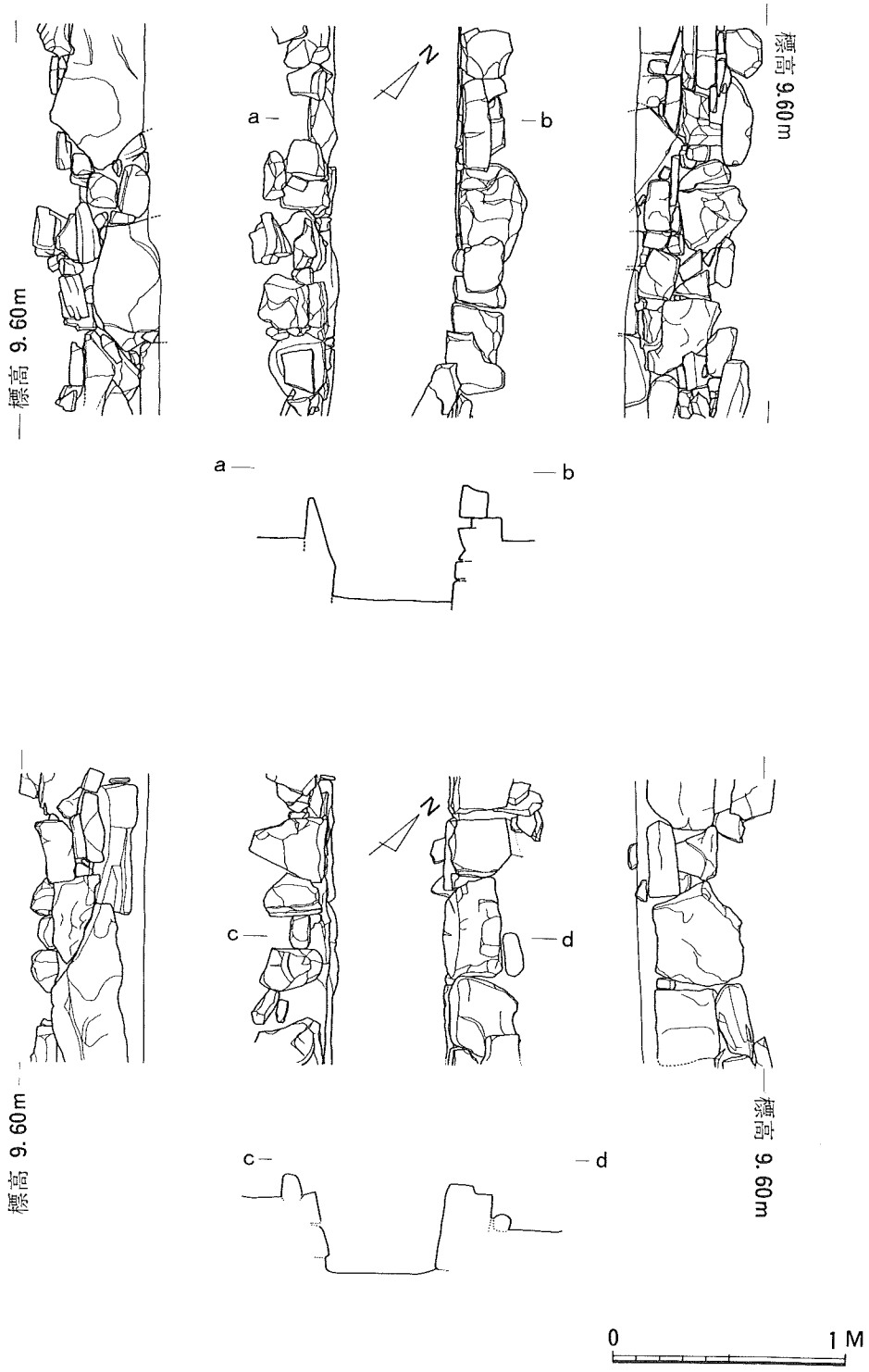


Fig 7　A側溝（部分）

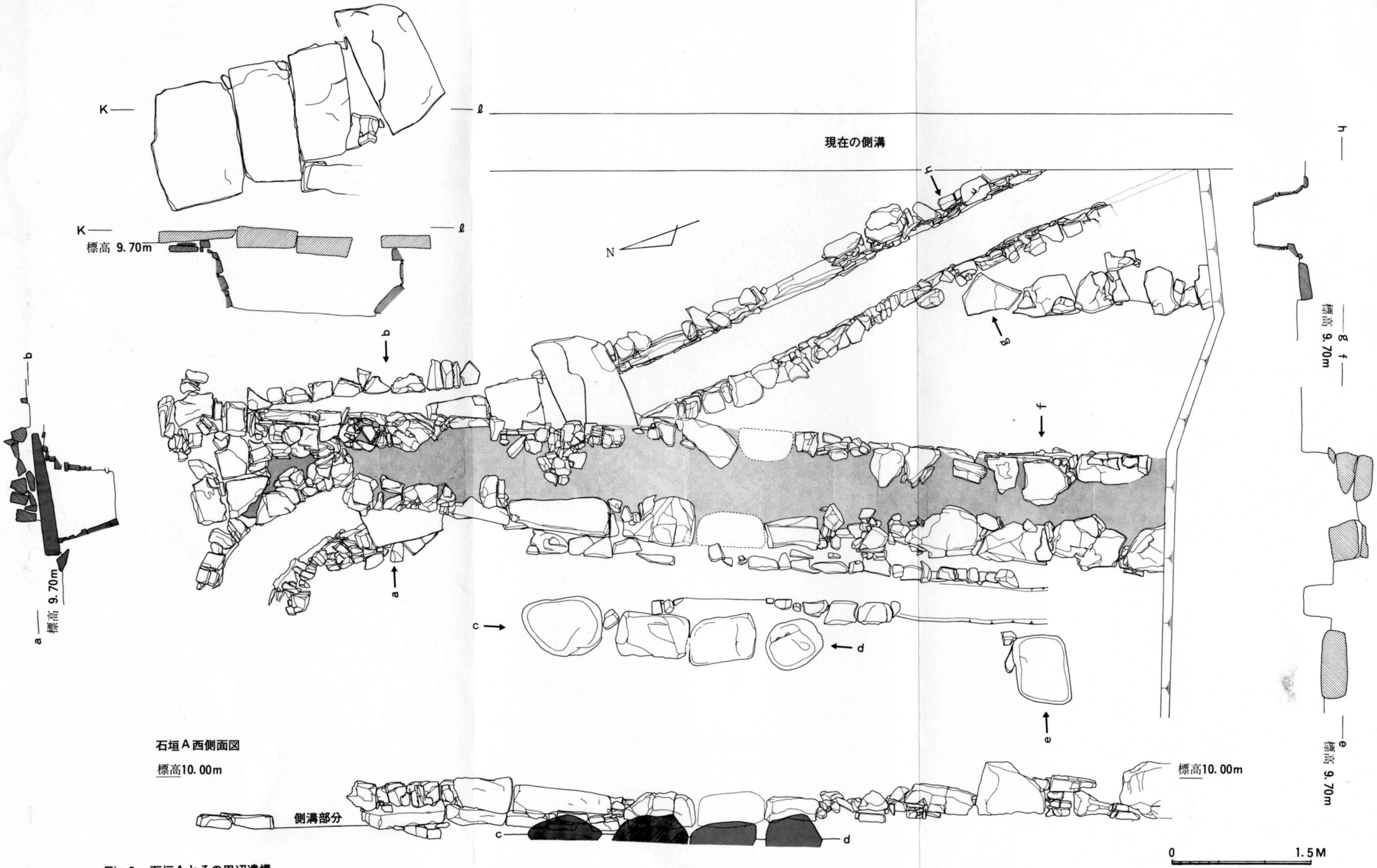


Fig 8　石垣Aとその周辺遺構

A側溝（Fig 7. 8，PL 5．6）

寛文九年（1669年）の金石城築造の際の石垣が発掘調査地南側にあり、A側溝はその石垣と平行するように西から東へ、屈折し北から南へと約30cmの傾斜を持ちながら走り、現代の側溝下に入って行く。現長約40m程、側溝巾は上端で約60cm、底巾約50cm程で、西端部分は壊わされ、北側積石は部分的に根石が残る程度である。カーブの部分において長方形状の板状巨石が4枚上敷され、暗渠化し、その上に石垣Aを築いている。

石垣A（Fig 8，PL 5）

北東から南西方向に、現長約11m、巾約1.2m程の石垣で、根石を残しほとんど壊わされている為、当時の石垣高は不明である。砂岩の石材を利用しA側溝の暗渠上に積石し、その北端は乱れ、南端は更に未掘部分へ延びるものと考えられる。礎石と考えられる配石列、D、E側溝等，石垣Aに付帯する遺構と考えられる。

E側溝（Fig 8，PL 5）

石垣Aの東際に現長約2m、巾約0.4m程、深さ約0.1m で東へ三角形状に開きかげんでA側溝に接するものと考えられる。

配石（礎石）（Fig 8，PL 7）

石垣Aと平行して並んだ配石が5個と西へ約27m離れた石垣Bの東側に1個検出された。石の大きさは長さ約60～80cm、巾約45～65cm、厚さ約30～40cmの安山岩を用いている。石の上面は部分的に平担で、石の間隔は南端の一個を除きほぼ接し、同様な石高である。これらの石は建築物の礎石と考えられるが、上部構造については現在のところ不明である。

D側溝（Fig 8，PL 7）

石垣Aと配石列との間隔が約80cm程有り、その間に、現長約5m、巾40cmで南に傾斜を持つ深さ約10～30cmの一個積みの側溝である。

F敷石（Fig 8）

石垣Aとほぼ平行し、北端はA側溝際から、南端は未掘部分へ更に延びる。現長約2.6mで、巾約40cmの板石を並べている。（副　島）

Ⅳ　遺　物

1　磁　器

碗（磁器碗）（Fig9，PL 16）

大きさは、大・中・小と様々で、内容も一番豊富である。文様も草花文、唐草文、牡丹、楓網目文等種々見られる。すべて手描きで印版手は見られない。また、埋め土中よりの出土であるため、完形品がほとんど見られない。

1 **(KA 2 - C 184)**　口径5.0cm、器高2.4cm、非常に薄手に仕上げられた白磁で、見込に草文を施している。一番小さく碗というより盃かぐい呑みの類であろう。

2 (KA 2 - C 161)　口径8.3cm、器高4.3cm、小形である。器表面に菊花を2輪描配する。

3 (KA 1 - C 331)　口径9.4cm、器高4.8cm、流れる様な端正な美しさをもち、口縁部は薄く仕上げてあるのに比べ、底部は分厚い。口唇部に数ヶ所の欠損をみるが完形である。高台は低い。黄土色の磁肌に白色釉が雲のようにかかる。

4 (KA 1 - C 23)　口径9.2cm、器高5.2cm、器表面に連続唐草文を描く。藍染付で濃淡を使いわけている。

5 (KA 2 - C 168)　口径9.1cm、器高5.2cm

6 (KA 2 - C 159)　口径10.7cm、器高5.8cm、器表面に牡丹文、器内口縁部に唐草文を描く。

7 (KA 2 - C 163)　口径6.3cm、器高4.4cm、数少ない完形品のひとつである。

8 (KA 2 - C 164)　口径9.3cm、器高4.8cm、器表面に楓文を描く。

9 (KA 1 - C 5)　口径10.2cm、器高5.3cm、器内外口縁部に緑釉がかかる。

10 (KA 1 - C 329)　口径10.9cm、器高6.4cm、中形の碗である。文様は器内外同位置に菊花文を描く。見込に蝶の銘款あり。口唇部が少々歪であるが全体としての姿は端正である。

11 (KA 1 - 118)　口径11.2cm、器高5.7cm、器表面に徳利と盃の絵文様を描き、「三㋡」の文字を書く。

12 (KA 2 - 251)　口径10.6cm、器高5.6cm 見込の図柄は花弁か葉のモチーフであろうか。器表面にも抽象的な連続文を描配してある。

13 (KA 2 - C 158)　口径10.8cm、器高5.8cm、器内口唇部に鎖の連続文、器表面は宝袋をモチーフにした宝づくし文様(註)である。(註：下川達彌氏の御教示による)

14 (KA 4 - A 58)　口径13.1cm、器高4.7 見込に草花文が残存する。高台内に「清水」の刻印あり。

碗（土物手）　(Fig 10 - 1 ～ 5, PL 16)

いわゆる土物といわれる碗で、磁器碗に比して流れるような端正な美しさはなく、分厚く重厚な感を受ける。大きさもやはり大・小ある。

1 (KA 1 - C 89)　口径11.5cm、器高5.5cm 口唇部が歪んでおり、器内外にロクロ調整痕が残るが方向が縦と横で違っている。また、見込部分に焼成時の目積の跡が残る。

2 (KA 1 - C 128)　口径11.0cm、器高4.8cm 1と同様ロクロ調整痕が器内外に残り、焼成時の目積の際の小粘土塊が附着している。

3 (KA 2 - C 400)　口径11.0cm、器高3.4cm　4 (KA 2 - C 169) 口径11.3cm、器高6.2cm

7 (KA 2 - C 276)　口径14.0cm、器高7.7cm 他の碗の器高に対する高台の高さの比率が0.15～0.19であるのに対し、0.26と非常に高い。

8 (KA 2 - C 532)　口径17.6cm、器高8.5cm 最大である。

鉢　(Fig 10 - 9 ～14, PL 17)

9 (KA 1 - C 19)　口径12.6cm、器高6.4cm 赤絵。文様は菊花文と網目文の複合文様

13 (KA 2 - C 637)　口径14.3cm、器高5.1cm 見込に龍の絵を描き、周囲には牡丹文と山水文

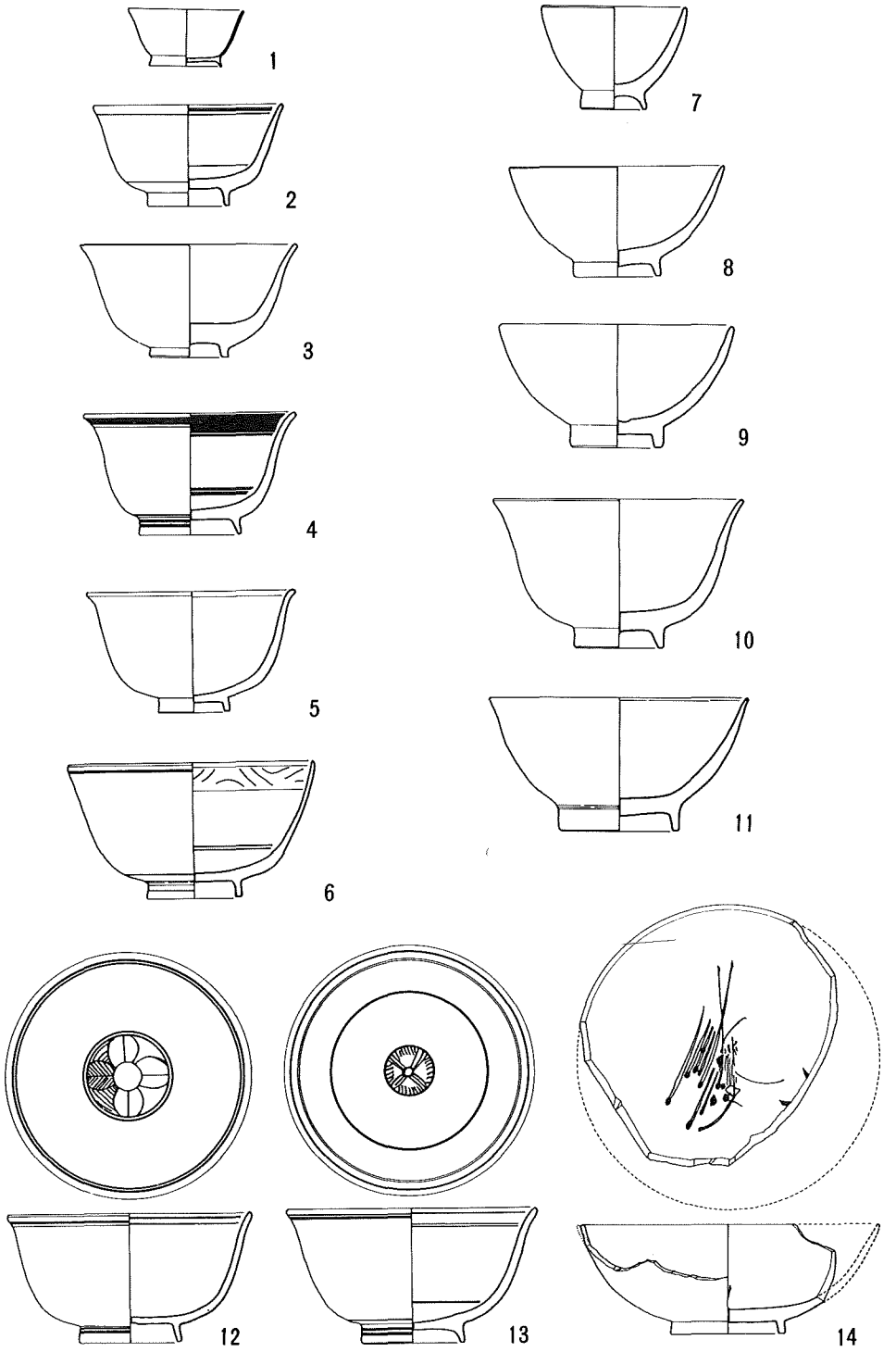


Fig 9　碗

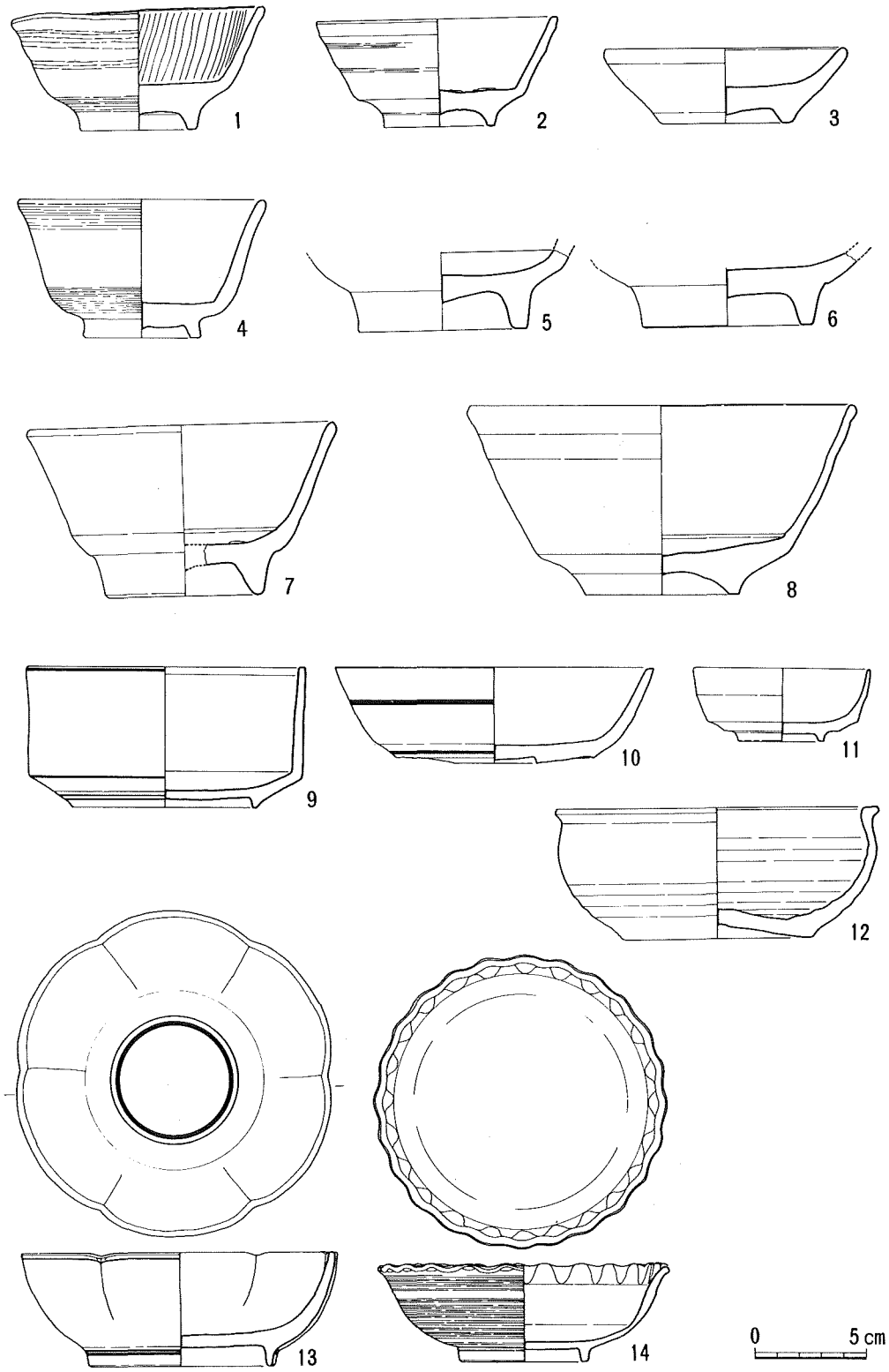


Fig 10　碗 (2) 鉢

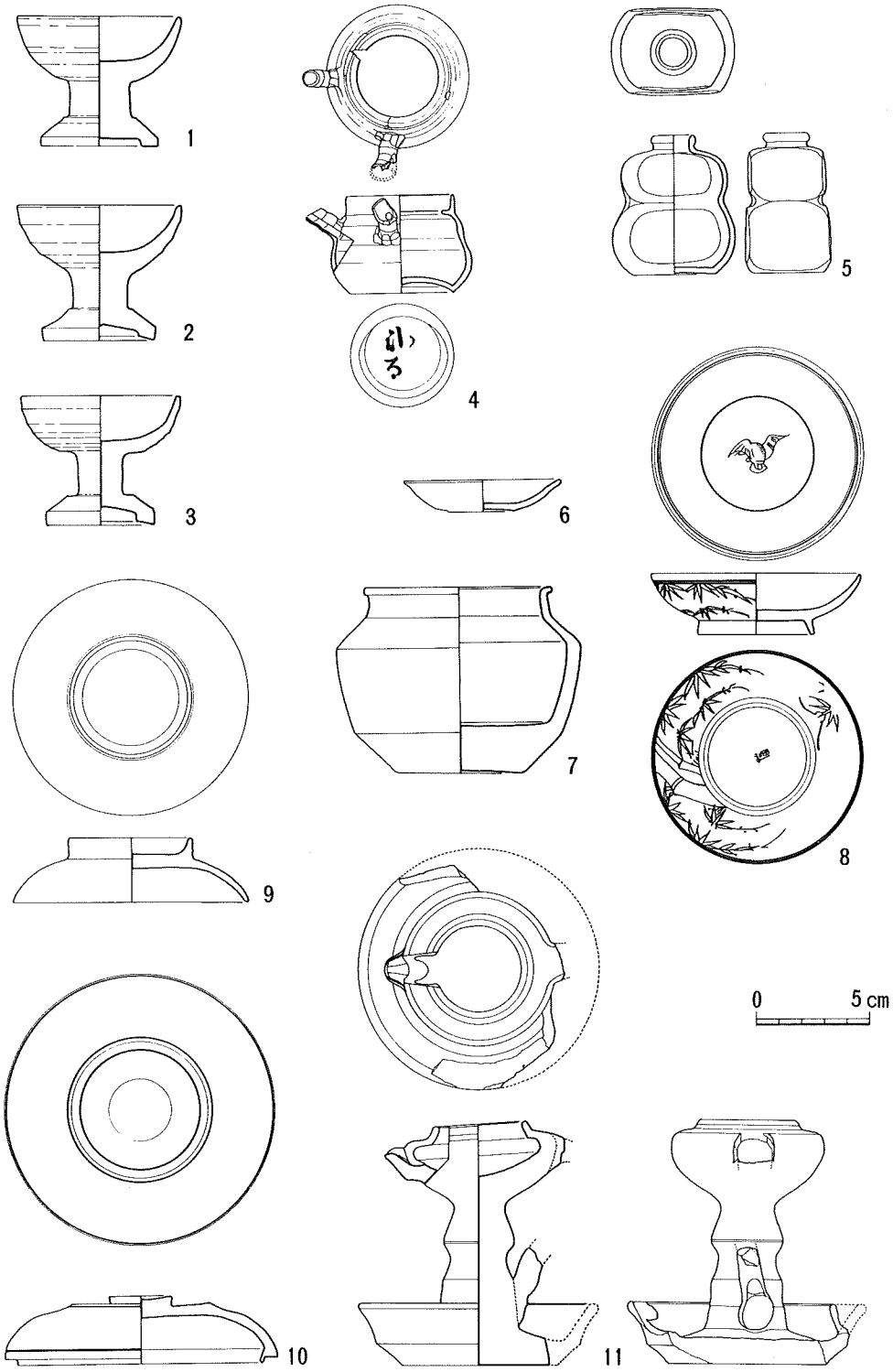


Fig 11　仏具、その他

とをそれぞれ交互に描配してある。器表面は山水文を描く。6面取りの型抜きで面と面の境に鎬がつけられている。

14 (KA 2 - C 157)　口径13.2cm、器高4.5cm 器壁も薄く端正な姿である。細かいロクロ引きの跡が顕著に器表面に見える。縁なぶりの極く簡単な装飾を施している。

仏具 (Fig 11 − 1 ～ 3, PL 17)

1 (KA 1 - C 1) 2 (KA 1 - C 2) 3 (KA 1 - C 3)　仏飯用である。口径7.0cm、器高約5.0cm、脚高約3.0cmと3個とも大体均一化している。すべて白磁無文でKA−1区からの出土である。

急須 (Fig 11 − 4) KA 2 - C 172

胴径6.2cm、高器4.2cm、器壁0.2cmの超小形で玩具のようである。蓋はない。底は無釉のあげ底で墨書してある。他に土瓶が1点出土している。(PL 17)

小瓶 (Fig 11 − 5) KA 1 - C11

器高6.1cm、幅5.4cm、厚さ3.8cm、器壁0.3cm、瓢箪形で薄く精巧に作られている。飴釉仕上げ。

皿 (Fig 11 − 6 ・ 8, PL 18)

6 (KA 2 - A 9)　口径7.0cm、器高1.4cm、小形の燈明皿であろうか。器内外にロクロ調整痕が顕著である。底部はハケ調整。

8 (KA 1 - C 20)　口径9.2cm、器高2.7cm 器表面に竹笹文を描き、見込には鳥であろうか、はばたいている。高台底裡には「福」の銘款がある。他の皿類としては、紅皿、大皿(径18.8cm)、現川焼であろうか刷毛目が美しい破片数点と変ったところで輸出用であろうかTEMPLEと英文字で銘款された皿もある。(PL 20)

蓋物 (Fig 11 − 9 ・ 10)

9 (KA 2 - A 15)　口径10.2cm、器高2.8cm 把手内に松のような樹木を、周辺にも樹木を描いている。見込には雲文を、器内周縁部には一見饕餮文を思わせる文様が描かれている。龍か。

10 (KA 2 - C 639)　口径11.9cm、器高3.0cm 身にぴったり合うよう盒子様に作られている。宝袋宝珠を染付けている。把手の径は2.7cmである。

燭台 (Fig 11 − 11, PL 17) KA 1 - C16

受皿径10.5cm、高さ2.7cm、碗部径6.7cm、総高10.5cm 唯一の出土品である。把手は欠損しているが、少々ねじって着けている。篦切り後片口を着けている。上碗は少し歪になり片口の方へ傾斜している。脚部に1段のくびれをつける。糸切り底で焼成時に石英粒が附着する。

壺 (Fig 11 − 7, Fig 12, PL 17 ・ 19)

7 (KA 1 - C 154)　口径8.3cm、器高8.1cmの小形壺である。器表面に文様が描いてあったらしいが欠損

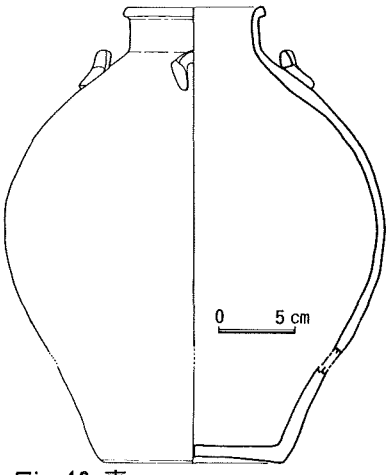


Fig 12 壺

しているため不詳。最大幅は肩部にあり10.7cm。

(KA1－C90)　口径9.6cm、最大幅25.2cm、推定器高30.3cm、底部附近で欠損している。古唐津系の四耳付茶壺で、底は僅かにあげ底である。(Fig 12)

銘款　(PL 20)

ほとんどが飾りとして一般化した年号銘で、「大明成化年製」「宣徳年製」「大明年製」が碗高台底裡に記銘されている。変ったところでは英文字の「TEMPLE」「清水（刻印）」「墨書」がある。また、吉祥文字の「福」も比較的多くみられ、文様化されたものまである。碗や鉢の見込に鷺の絵も割合に見られる。

これら磁器類のほとんどが島外からの移入品と考えられる。対馬の窯業は釜山窯（朝鮮との貿易のため設置した和館内で朝鮮の陶土で焼いた。寛永18年（1641年）～享保2年（1717年）にその起源をみる。文献には釜山窯が廃窯した年に久田窯を開窯したとあるから、実際はその前後と考られる。白磁・青磁・染付けを焼いた。)その後享保11年（1726年）志賀窯が対馬藩の御用窯として開窯され、吉田又市の名陶工を生み明治末まで続く。この志賀窯の伝統を受け継ぎ明治20年（1887年）頃吉田又市の孫桟原愛助が小浦窯を興す。立鶴や雲鶴象嵌の釜山窯写しに代表される。明治40年（1907年）廃窯。

立亀窯はその起源は明かでないが、白磁、青磁を主体とし、扇、栗、草花文様などを染付けた。弘化年間（1844年～1849年）に開窯した阿須窯は民窯として明治後年まで続く。この他に、小浦皿山窯があるがその興亡が明確でないが最初の開窯ともいう。

これらの窯の遺構が残存するのは立亀窯だけである。　（田　川）

2．陶　器（Fig 13. 14，PL 21）

陶磁器類は調査地北側の礫層より検出された江戸中期～明治初期にかけての日常雑器類で、陶器の器種は鉢、壺、甕、その他破片が多数出土した。

鉢（1～7） 1、2共底部より内弯しながら立ち上り、口縁部がわずかに内反する小鉢である。折り返し口縁で、底部は上げ底である。1は器高6cm、口径12.4cmで、内外面共横ナデ調整で胎土に石英を含み、焼成は良好である。色調は渋い暗茶色を呈する。2は器高10.6cm、口径17.6cmで胴部に一条の隆起帯をめぐらし、内面胴下半部に青海波文のタタキ痕があり、色調は灰褐色を呈し、胎土に石英粒を含み焼成は良好である。3～7は底部より内弯しながら立ち上り、そのまま口縁部に至る。口縁部は折り返し口縁で逆L字形を呈し、口唇部はやや垂れ凹状を呈する。底部は上げ底である。3は器高 9.8cm、口径22.8cmで胴部に一条の隆起帯が走り、内面の胴下半部に青海波文のタタキ痕がかすに残っている。　焼成良好で胎土に砂粒を含み、外面は暗茶褐色、内側は赤褐色を呈す。4は器高11.4cm、口径24.2cmで、口縁部内側の綾は高温度を受けたと見え、釉が溶けて黒く凝固している。胴部の内外に一条のヘラ削り沈線を有し、色調は赤褐色で緑茶色の釉、内側は暗褐色を呈している。焼成は内外面共に気泡が多く余り良

くない。5は器高16cm、口径23cm、胴部の内外面共に3条の沈線がある。胴部は口縁部からほぼ円筒状で内弯しながら底部に至る。底部中央の径3cmの穿孔を中心にして、径1cmの穿孔8個、2.6×1.6cmの穿孔4個（復元推定）を有する鉢である。胴部内面に青海波文のタタキ痕があり、色調は茶褐色、内側は暗褐色を呈し、胎土に結晶粒、砂粒を含み焼成は良い。6は取手付鉢で、器高7.5cm、口径13.2cmで、3～5と同様な特徴を有する。糸切り底部で、胴上半部に刻目文様が4段、外面をカンナ削りを施こし器壁は薄い。色調は赤褐色を呈す。形態的に蓋付で、片口が付くと考えられる。類例が報告されている。（大阪府柱本遺跡[註1]、岡山県下市瀬遺跡[註2]、兵庫県安富東中学校遺跡[註3]）。7は片口付鉢で、器高19.4cm、口径16.8cm。口縁部は折り返し口縁で逆L字形を呈し、口唇部がやや垂れ、底部

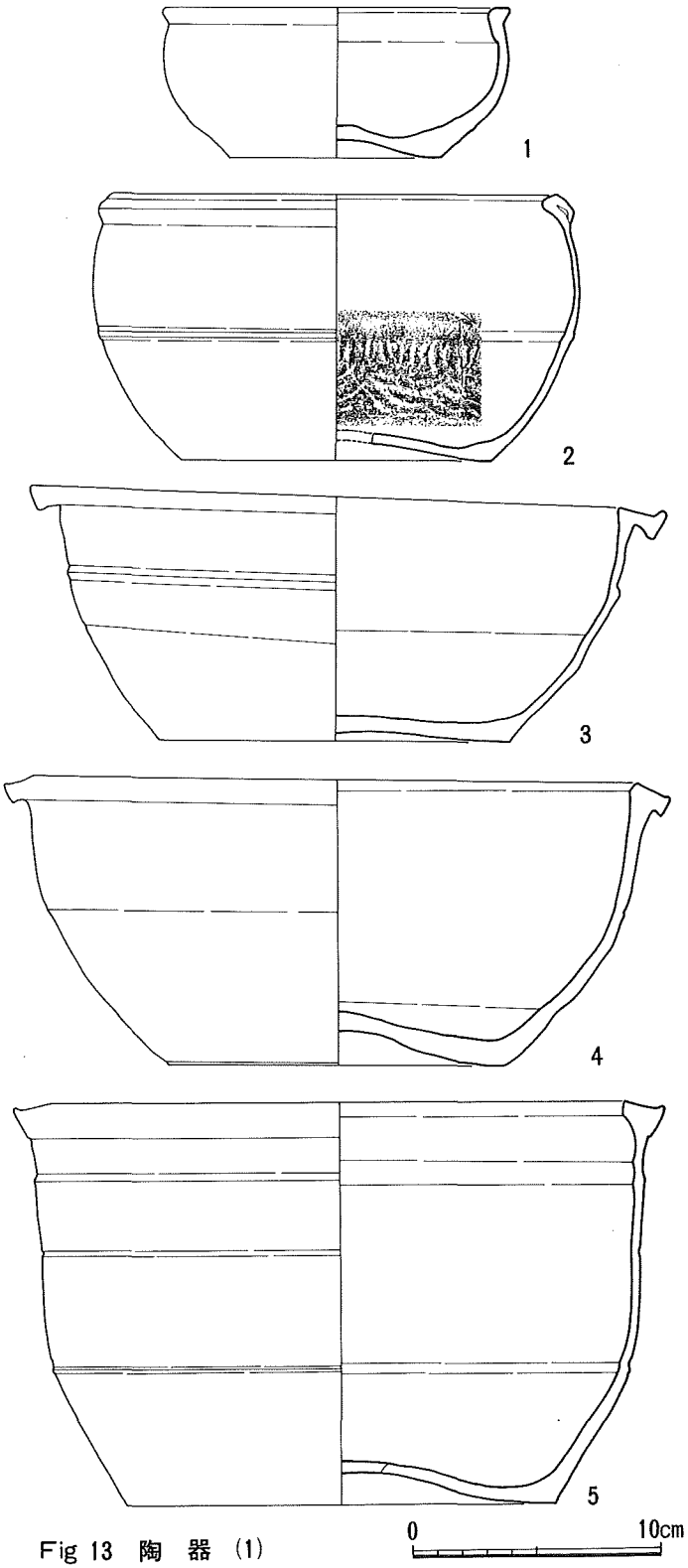


Fig 13 陶 器 (1)

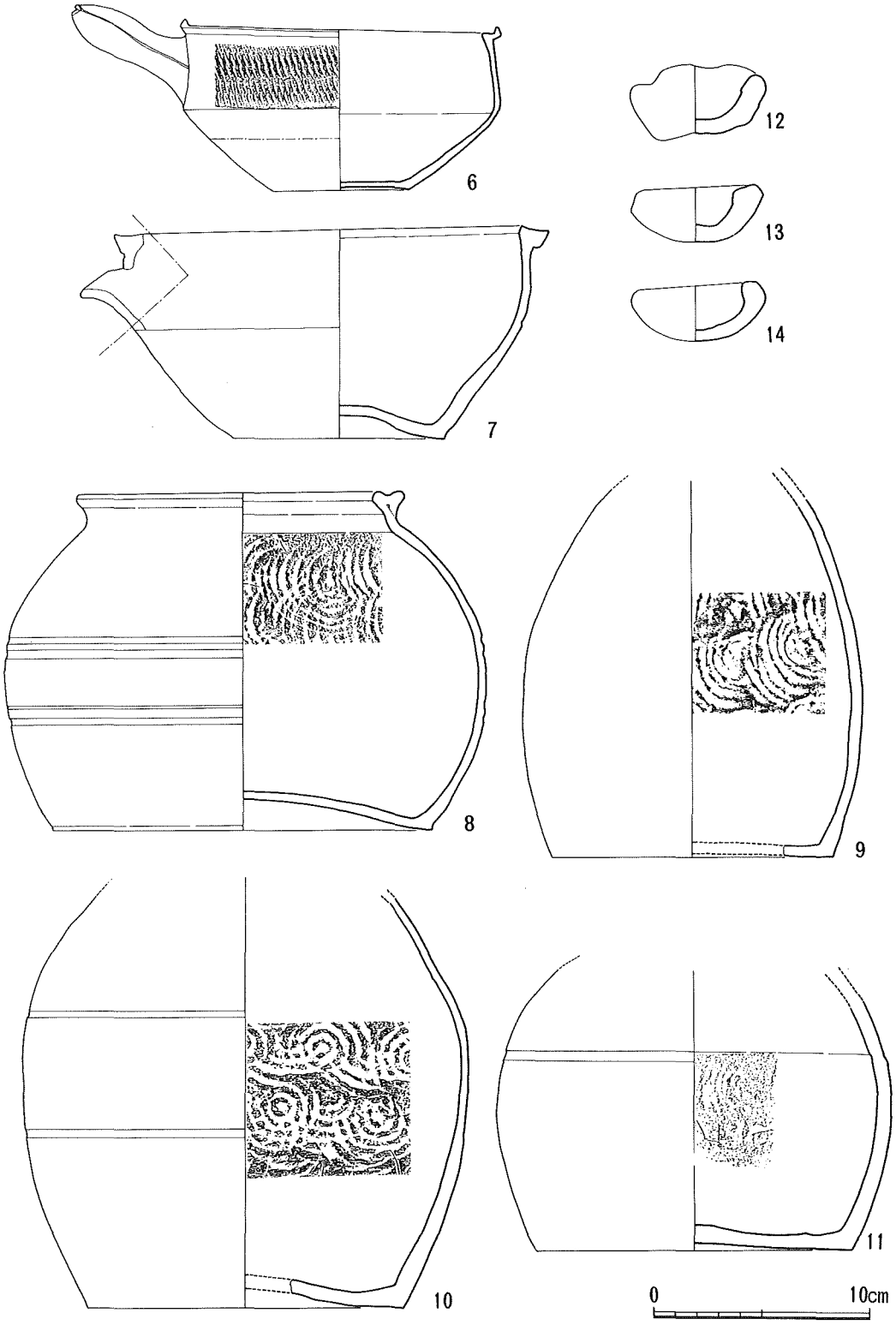


Fig 14 陶 器 (2)

は上げ底である。色調は茶褐色を呈す。

壺（8・9・10・11） 8は器高15.7cm、口径12.6cmの広口壺である。口縁部はT字状をなし、外側から内への折り返し口縁で、中央部は凹が付く。胴部は外反し、底部は上げ底である。内面に青海波文のタタキ痕があり、色調は灰褐色を呈し、灰色の釉が垂れている。焼成良好。9～11は口縁部欠損で、底部はやや上げ底である。9は底径 6.5cmの長頸壺（成は瓶）であろう。内面に青海波文のタタキ痕が顕著で、外面は暗褐色を呈し、煤の付着がみられる。底部は平底で、焼成時の6個の高台痕が付着している。10は底径 7.3cmで、胴部に2条の沈線を有し、底部より内弯しながら胴部から頸部にかけすぼまる。内側に青海波文のタタキ痕が顕著で、色調は暗褐色を呈している。11は底径 7.3cmの広口壺で、胴部に2条、内に1条ヘラ削り沈線が走り、青海波文のタタキ痕が残る。色調は内外共につやがなく、茶褐色を呈す。12～14は口径約 2.2～ 2.8cm、器高 2.6～ 3.1cm程の小形で、緑色、茶色、赤褐色、白色と釉かけされた磁器で，窯に使用された遺物であろう。

以上の陶器類は、肥前系統のものがほんどと思われるが、季朝風なものも見られる。（副 島）

註1．「高槻市柱本遺跡試掘調査概要」柱本遺跡調査会　1972、

2．「岡山県埋蔵文化財発掘報告(3)」岡山県教委　1973、

3．「中国縦貫自動車道建設に判う埋蔵文化財調査報告書（宍粟編）」兵庫県教委　1976、委　1976、

3．瓦 (Fig 15)

軒丸瓦（1・2′） 内区は三ツ巴文で尾は接せず、外区は外縁で14個の珠文を配している。瓦当径は14.6cm、厚さ 1.7cmで灰黒色を呈する。2も1と同様で内区に三ッ巴文、外区は外縁で珠文12個を配している。瓦当径は13.5cm、厚さ 2.0cmの完形品で、色調は灰黒色を呈している。

軒平瓦（3・4） 3は中心飾部分の破片で、中心飾は草葉文状を呈している。色調は灰黒

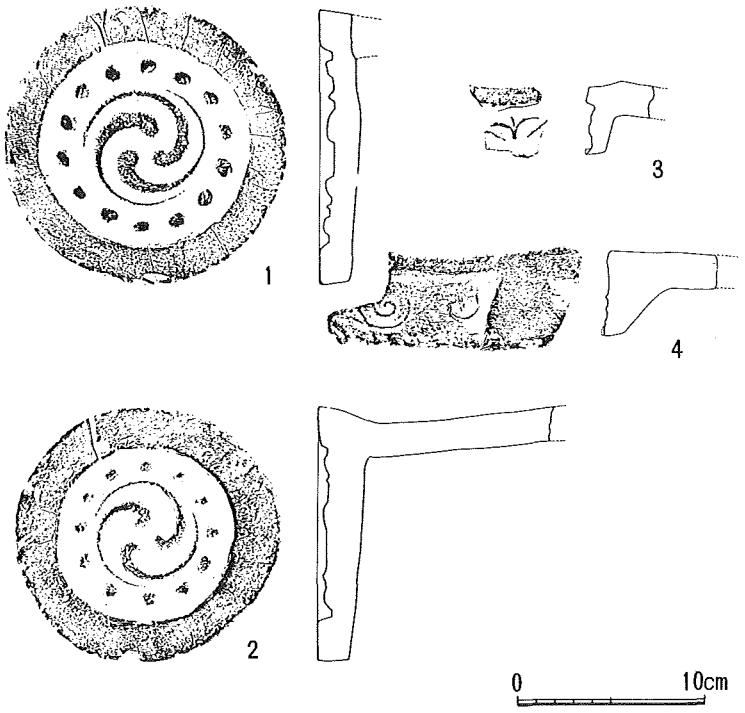


Fig 15　瓦

色。4は中央部より右半分の破片で、2巻の唐草文が配され、中心飾については不明である。色調は灰黒色を呈している。

以上の軒丸、軒平瓦はA側溝内埋土より出土し、他に平瓦、丸瓦等多数検出された。

（副　島）

4．金属製品類（Fig 16・17　PL 22～24）

きせる　きせるは雁首部が9本、吸口部が5本出土している。いずれも真鍮製である。雁首は全て河骨形で、脂返しが長くて曲線を描き、胴部まで直線的な線をもつものa類と、脂返しが短くて若干の弯曲をもつものb類と、肩付があるものc類の3つに分類される。

a類　3はカマドA内の炭火物に混って出土したもので、脂返しが長く、曲線を描きながら胴部に直線的な線で延びている。胴部は大きく、火皿は他の雁首に比べ浅い方である。重量は8gで、江戸時代初期～中期にかけてのものであろう。1は胴部が一部欠損し、火皿は深く、脂返しの曲線も3に比べ短い。2も1と同様で短い。重量は1が7g、2が6gである。4は火皿、胴部が欠損している。**b類**　5、6の2本共、脂返しの部分の曲りがわずかに残る程度で重く、造りががっしりし、器長が6cm未満で短い。6は火打付雁首で、火皿が欠損している。重量は11.5g。5は脂返しと火皿部分がつぶれている。器長は5.5cmで、重量は10gである。**c類**　8、9共に脂返しの部分が短かく、雁首の長さも短い。それに比べ7は雁首も、脂返しも長い。8は緑青をふき、厚くもろい。胴部が一部欠損している。重量9g。9も8と同様で、全長5.2cm、重さ5.5gである。7は火皿と脂返し部分が欠損している。器長は長く、長さ3.4cmの肩付部分に47条の平行沈線を有する、細長い雁首であろう。これは如信形といわれ、茶道趣味の産物である。[註1]

吸口部は、胴部から吸口にかけしぼみ、直線的な線で吸口に至る。吸口部分の角は薄くて丸くなり、比較的小形のa類と、胴部から吸口にかけ一担しぼまり、再び吸口部分でふくらむb類の2つに分けられる。**a類**　3本共器長が7cm以下で、短く細く、重量は10で4g、11で4g、12で6gとb類に比べ軽い。**b類**　器長が7cm以上で、重量は13で15g、14で10gと重くがっしりした造りである。又、a、b類の5本共、胴部羅宇の竹材が残っている。雁首、および吸口部も江戸時代元禄以降～幕末・明治初期にかけてのものと考えられる。

かんざし　耳かきを付けた真鍮製2本とセルロイド製1本が出た。装飾品としての髪飾りは、江戸時代・元禄以降結髪用具の増加につれ発生したようで、18世紀中頃以降に耳かきを付けたり、いろいろ細工している。1は全長24.3cmで細長く、先端部が片方欠損している。節を4ケ所付け、一担脚部と耳かき部分との間でくびれを入れている。重量10g。2の先端部も2本共欠損しているが、耳かき部分から脚部にかけ、表裏共に線刻を細工し、直線的な線をもつ細身のかんざしで、重さ5gである。3は全長約12.7cm程で、中は空道でアメ色を呈したセルロイド製で、重さ4gである。A側溝上面の埋め土より検出したもので、明治時代の細工品である。

鉄　鍋　破片であるが大形で、口径約80cm程の平鍋である。

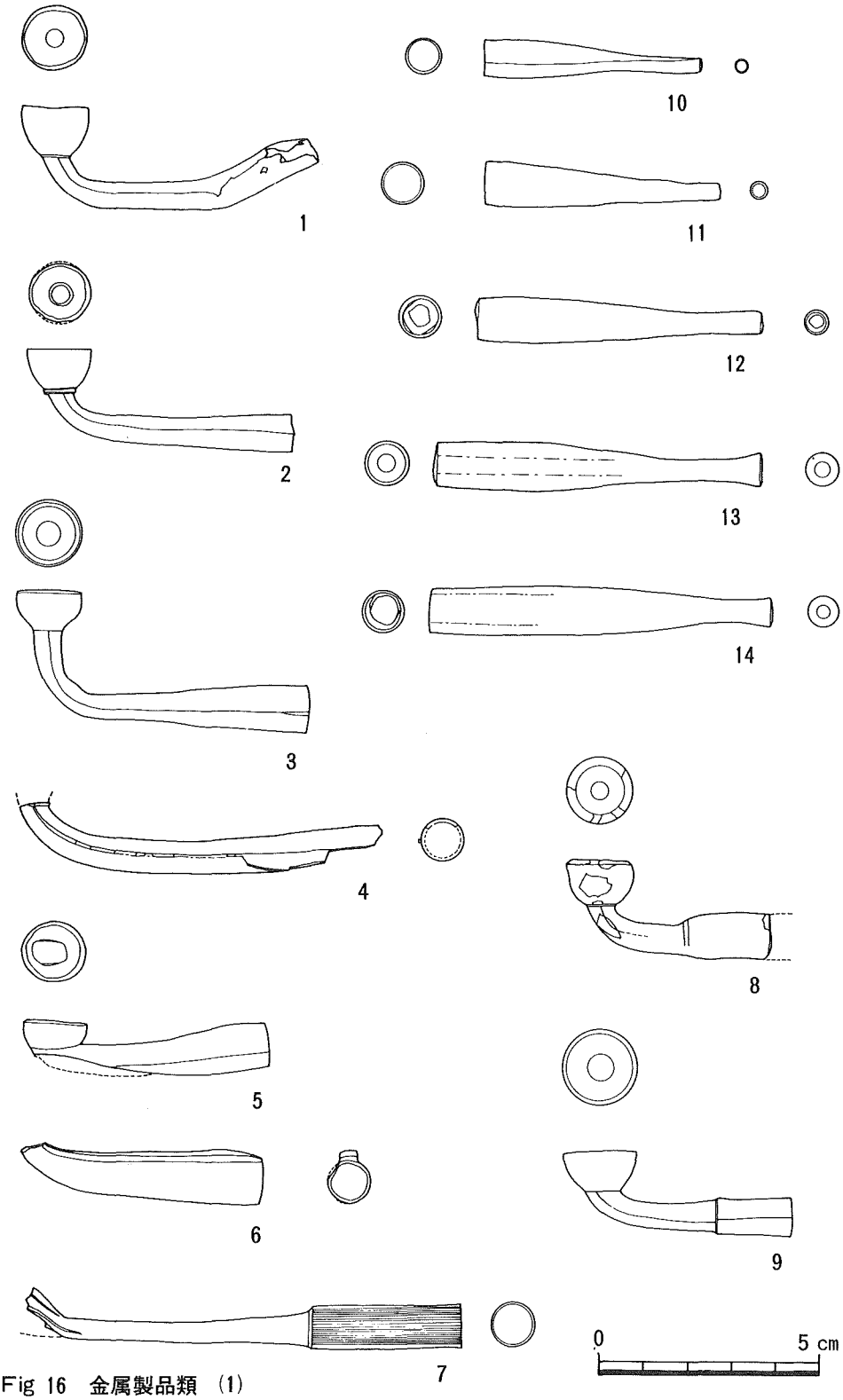


Fig 16　金属製品類 (1)

銭貨　A側溝内、および礫層より10枚の寛永通宝が出土している。

鉄滓と鋳型　鉄滓は表面が粗雑な多孔質のもので、6cm以下の小形と10cm以上の大形のものが約50個程出土。砂岩製の鋳型が2個出土し、1つは復元口径約12.6cm、厚さ約1.6～2.6cm、器長約5.7cmを呈し、深さは約2.7cm程で、他も同様で復元口径約14.2cm、厚さ約2.2～2.6cm、器長約4cm程、深さ約2.2cm程度で、外観は円柱状をなしている。鋳型の内側は碗形の形状を呈し、内・外面共鉄滓の付着が著しく、外面の鉄滓には土の付着がみられる。いずれも破片である。　（副　島）

註1．「日本の喫煙具」専売事業協会、1967
雁首、河骨形等の用語類については本編の用語を使用し、参考にした。

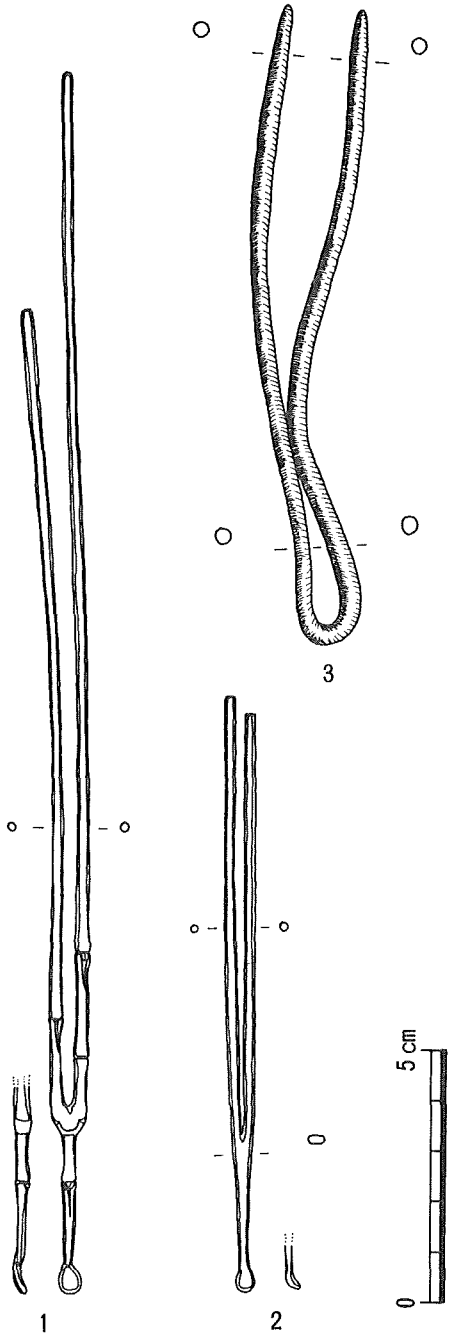


Fig 17　金属製品類 (2)

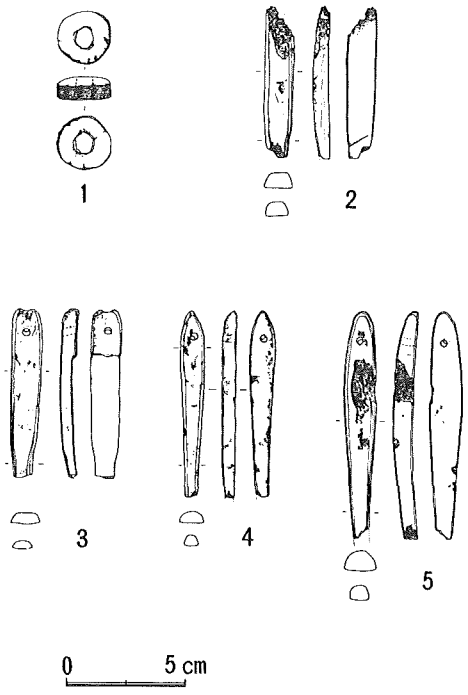


Fig 18　骨製品

5．骨製品（Fig 18，PL 25）

骨製品は全部で５個出土している。そのうちの４個は鯨かイルカの大形海獣の骨で作られた魚網補修用と考えられる骨針であり、他１個は鹿角製の目貫である。骨針の針穴は、図のように基部を上にした場合、３を除いて表から裏へ斜め下りにあけられており、直径も約３㎜と共通している。（計測値はすべて残存部で計測したものである。）

１　（ＫＡ２－１）

材質は鹿材で輪切りにして上下両面とも良く研磨してある。側面は未加工である。上面はゆるやかに弯曲している。煙草入れか印籠などのように腰にぶらさげるものの目貫であろう。（外径約2.4cm、厚さ1.0cm、穴径・上0.7cm、下0.9cm、重さ４ｇ）

２　（ＫＢ５－　）

先端部、基部ともに欠損している。針穴は一部残存する。表裏面とも比較的良く研磨してある。基部から約６cm 位のところからくびれて急に細くなり先端部へと続く。（Ｌ6.3cm、Ｗ1.2cm、Ｈ0.7cm、先端部Ｈ0.6cm）

３　（ＫＢ５－４）

先端部が欠損している。裏面の基部より約２cmのところで段をつけ、そのままの厚さで先端部へ続く形態は他の製品と相違する。この段は意識的につけてあり、研磨調整不良である。全体の研磨は悪い。針穴は他と違って斜め上りにあけてあり基部は丸い。（Ｌ7.0cm、W1.2cm Ｈ0.6cm、中央部Ｈ0.5cm、先端部Ｈ0.3cm）

４　（ＫＡＨ－２）

５と形態は似ており、研磨は良く、弯曲もあまりなく、くびれ部を作出せず滑かに先端部へと移行してゆく。基部先端はとがる。２、３の形態と２種類に区分できる。使用する箇所が違うのだろうか。（Ｌ7.8cm、W1.0cm、Ｈ0.5cm）

５　（ＫＢ８－５）

Ｂ－８区より出土した。骨針中最大のもので弯曲も深いし、研磨も一番良い。表面中央部にイタリック体の外国文字（***Cas Tau Tu*** ……）が刻入してあるが、破損しているため全部判読できない。（Ｌ9.5cm、W1.3cm、Ｈ0.8cm、先端部Ｈ0.6cm）　（田　川）

Ⅴ　概　括

宗氏の治世約700年、これまで良く知られているはずの宗氏の居城「金石城」が、実は未知の部分が多く、文献も絵図面もないという状況で調査はスタートし終了したわけである。面的に広大な広がりをもつ城に対して、極く狭い範囲を調査するのであるから、遺構等は一部しか検出できないわけであるが、可能な範囲での調査によって一応所期の目的は達したといえよう。

金石城はかっての国府（現在の厳原町役場がその地だという。）に近く、島分寺跡地に築造されているという。昭和24年、永留久恵氏は奈良時代のものと思われる塼を採集されているが、

礎石等は発見されていない。金石城築造時に破壊されてしまった可能性は確かに残されているとはいえ、調査により確認される可能性も残されている。

享禄元年（1528年）に築館され、城としての機構・機能を持つようになった寛文９年（1669年、―この頃が宗氏の一番充実していた時代といえるだろう。）までの間に幾度か改修され、漸次大規模化していっただろうことは，簡単に推察できる。その裏付け資料として今回調査し、検出した遺構群を検討してみると、前章で述べた如くこれらの遺構はそれぞれに相関関係をもっていると考えられる。それらの築造・利用・破棄等は多少の時間的な差は認められても、時期的に長い隔たりはないと考えられる。しかし、それらの遺構が何故そこに、何のために必要なのかという更に一歩突っこんだ結論を出すことは、それらの遺構の周辺に他の遺構を検出できなかった現時点では早計であろう。

今回検出した遺構は、プールの下を通り厳原中学校の方へ延びているし、Ａ側溝と同様の側溝が厳原中学校の校庭で数条確認されていることでもあり、城内至るところに遺構が広がっている。今後の調査に期待するところである。また、今回の調査を機に、多くの方々が興味を特たれ、機会あるごとに調査をし、資料を集積し、解折していく地味な研究が続けられていくことを願って止まない。最後に微力な私達に御協力と御指導をくださいました皆様方に記して感謝いたします。

（田　川）

参　考　文　献

1．長崎県史　藩政編　長崎県　1973
2．対馬の古跡　永留久恵　1970
3．対馬風土記　第11号　対馬郷土研究会　1974
4．厳原町教育史　厳原町教育委員会　1972
5．肥前陶磁の系譜　永竹　威編　1974
6．長与皿山古窯物原発掘報告書　長与町教育委員会　1974
7．江永古窯　佐世保市教育委員会　1975
8．有田町猿川古窯跡（１・２）　佐賀県教育委員会　1969、1971
9．有田天狗谷古窯　有田町教育委員会　1971
10．原色陶器大辞典　加藤唐九郎編　1971
11．原色版国宝　毎日新聞社　1969
12．仏教考古学講座　第５巻　石田茂作監修　雄山閣　1976
13．長崎県の歴史　箭内健次　文画堂　1958
14．増訂　対馬島誌　対馬島教育会編　名著出版　1973
15．新対馬島誌　新対馬誌編集委員会　1965
16．和白遺跡群　福岡市埋蔵文化財報告書第18集　福岡市教育委員会　1971
17．茶臼山・東光寺遺跡　久留米市文化財調査報告書９集　久留米市教育委員会　1974
18．笹栗古代製鉄遺跡発掘調査報告書　福岡市土地開発公社　1969
19．鉄の考古学　窪田蔵郎　雄山閣考古学選書９

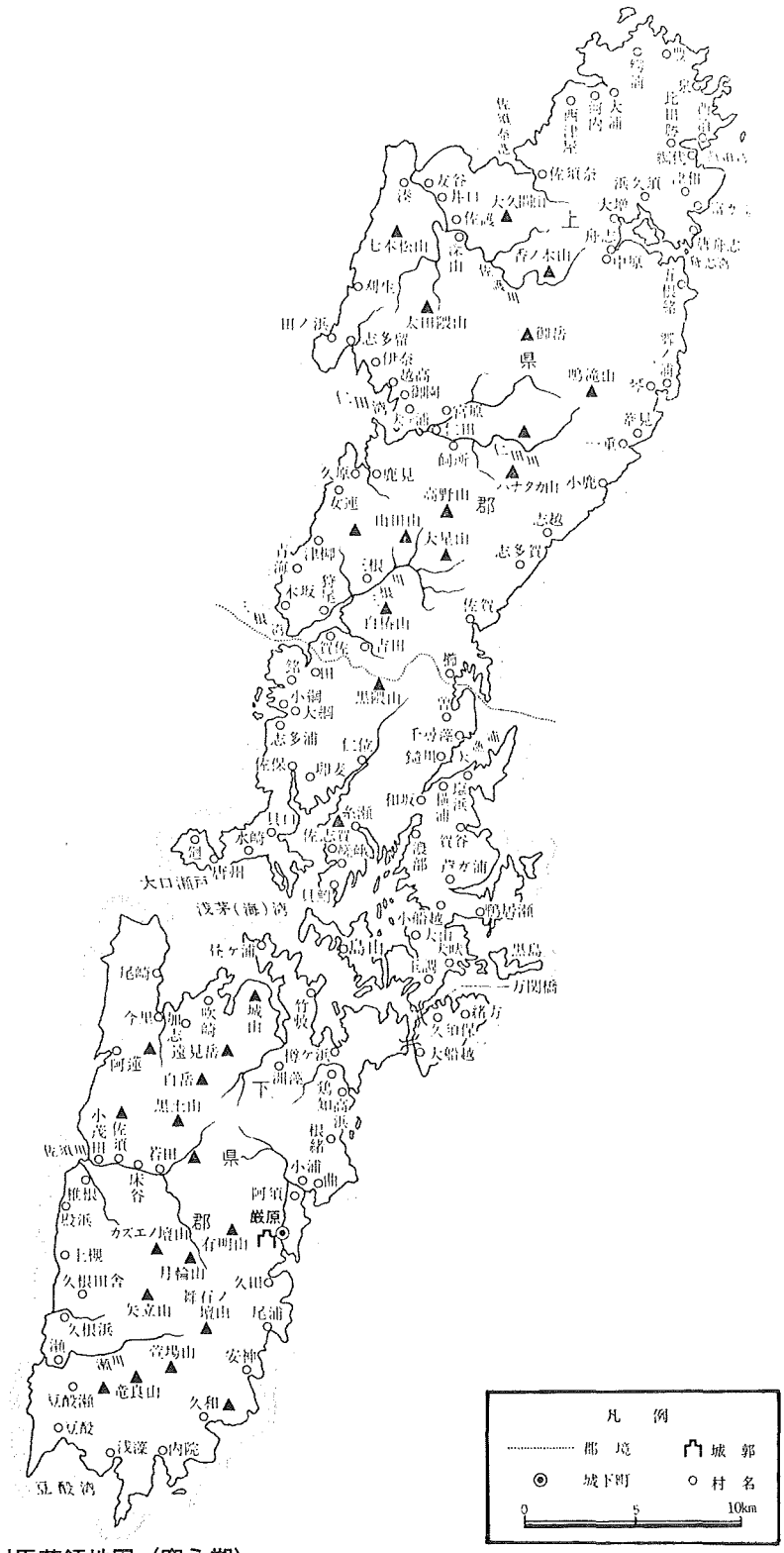
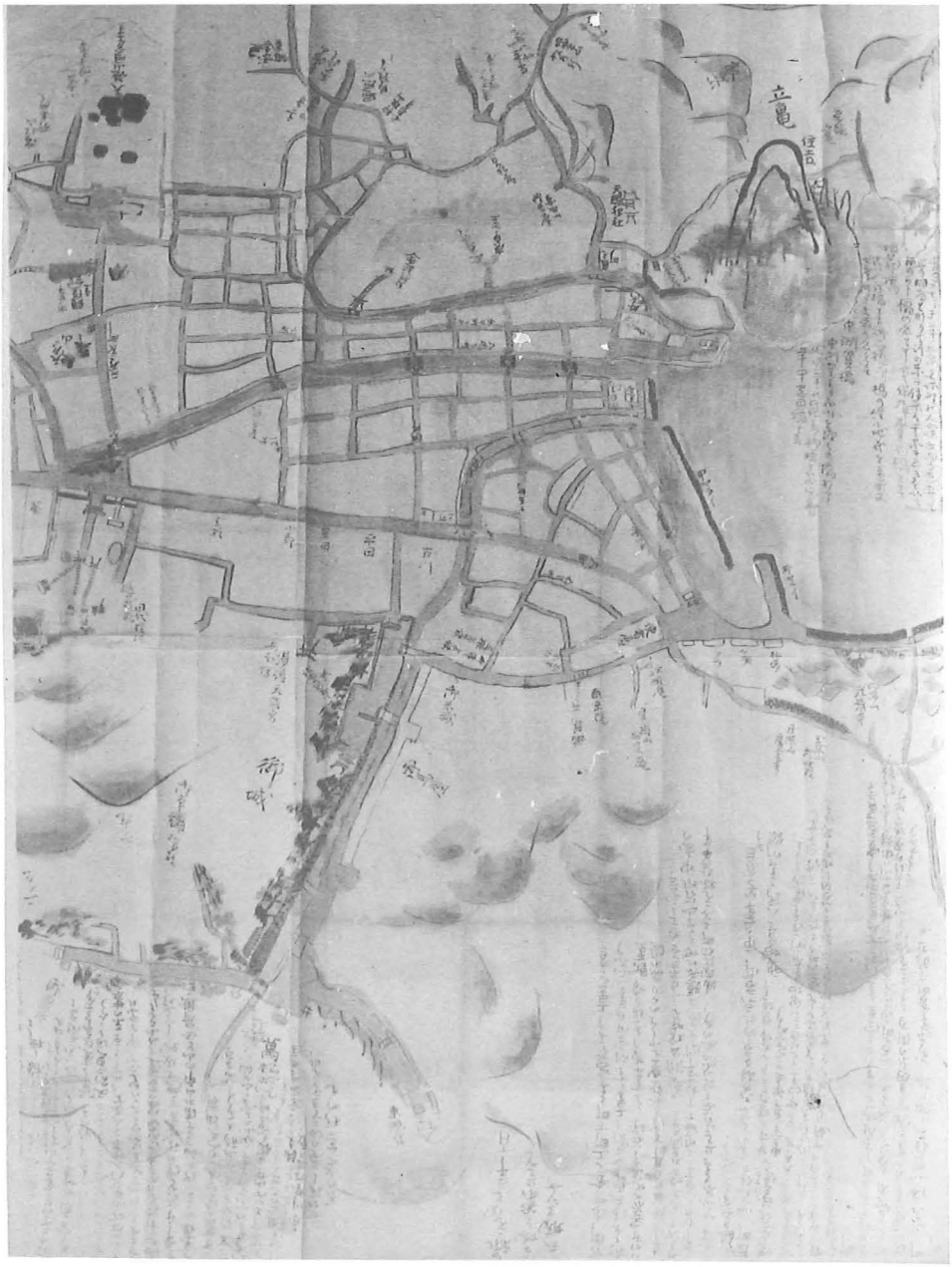


Fig 19　対馬藩領地図（寛永期）

PLATES

ＰＬ１　遺跡遠景（南より北）

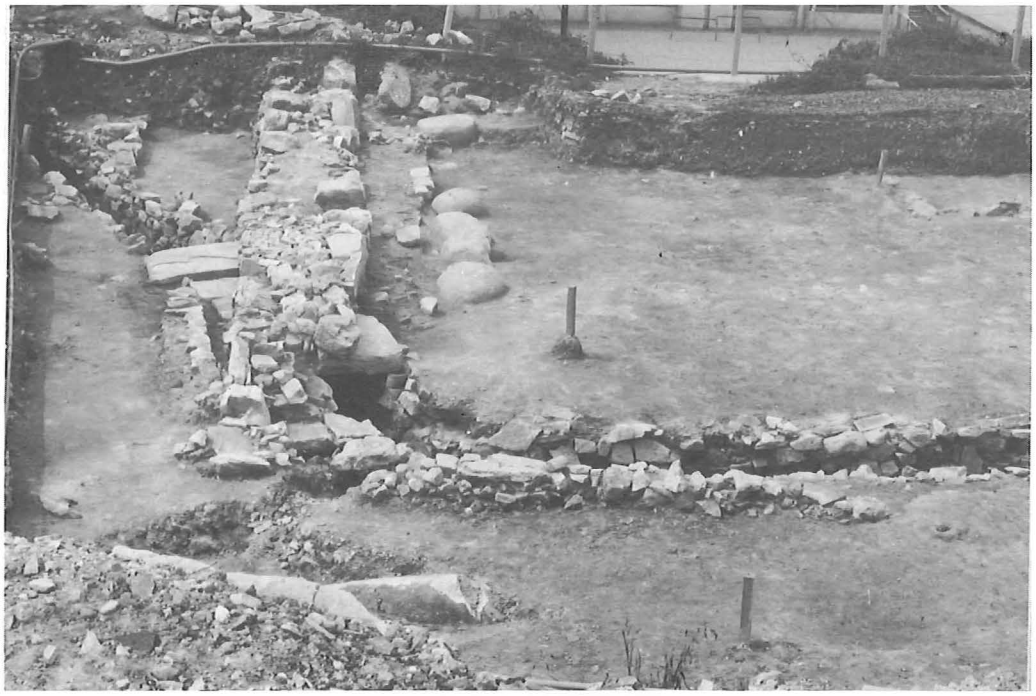
ＰＬ２　清水山城（二ノ丸）より厳原港を望む



ＰＬ３　府内見取絵図

ＰＬ４　調査区全域（東より）

ＰＬ６　Ａ側溝（暗渠部分）東より



ＰＬ５　石垣Ａとその周辺遺構（北より）

ＰＬ８　石垣Ｂとその周辺遺構（南より）

ＰＬ７　Ｄ側溝と礎石（西南より）

ＰＬ９　Ｂ側溝と石垣Ｂ（西より）

ＰＬ10　石垣Ｂ・Ｃ・Ｄ（西より）

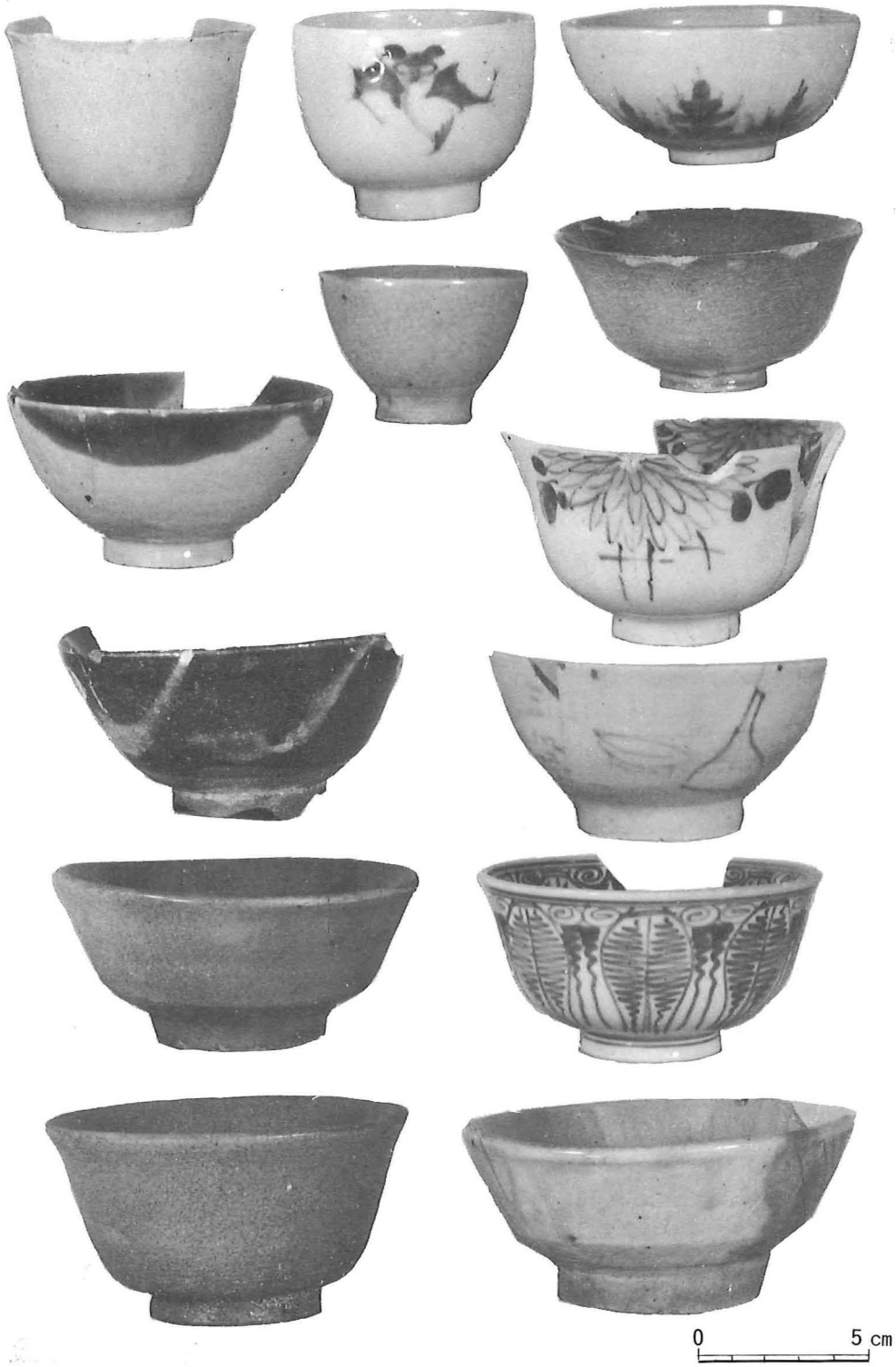
ＰＬ11　石垣Ｄと埋土（北より）

ＰＬ12　石垣Ｃ（北より）

ＰＬ13　カマドＡ・Ｂと石垣Ｂ（西より）

ＰＬ14　カマドＡ・Ｂ

ＰＬ15　カマドＡ（焚口部分）



PL16 碗

PL17　鉢その他

PL18 皿

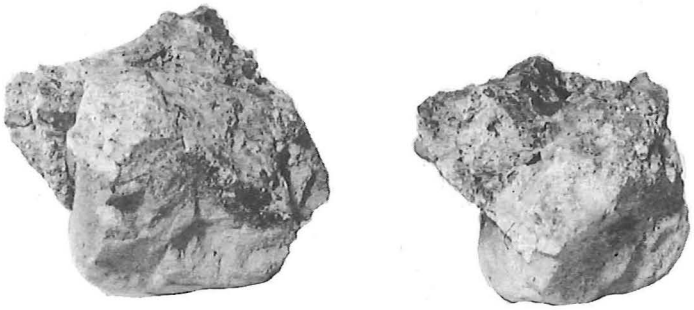
ＰＬ19　壺その他

PL20　銘　款

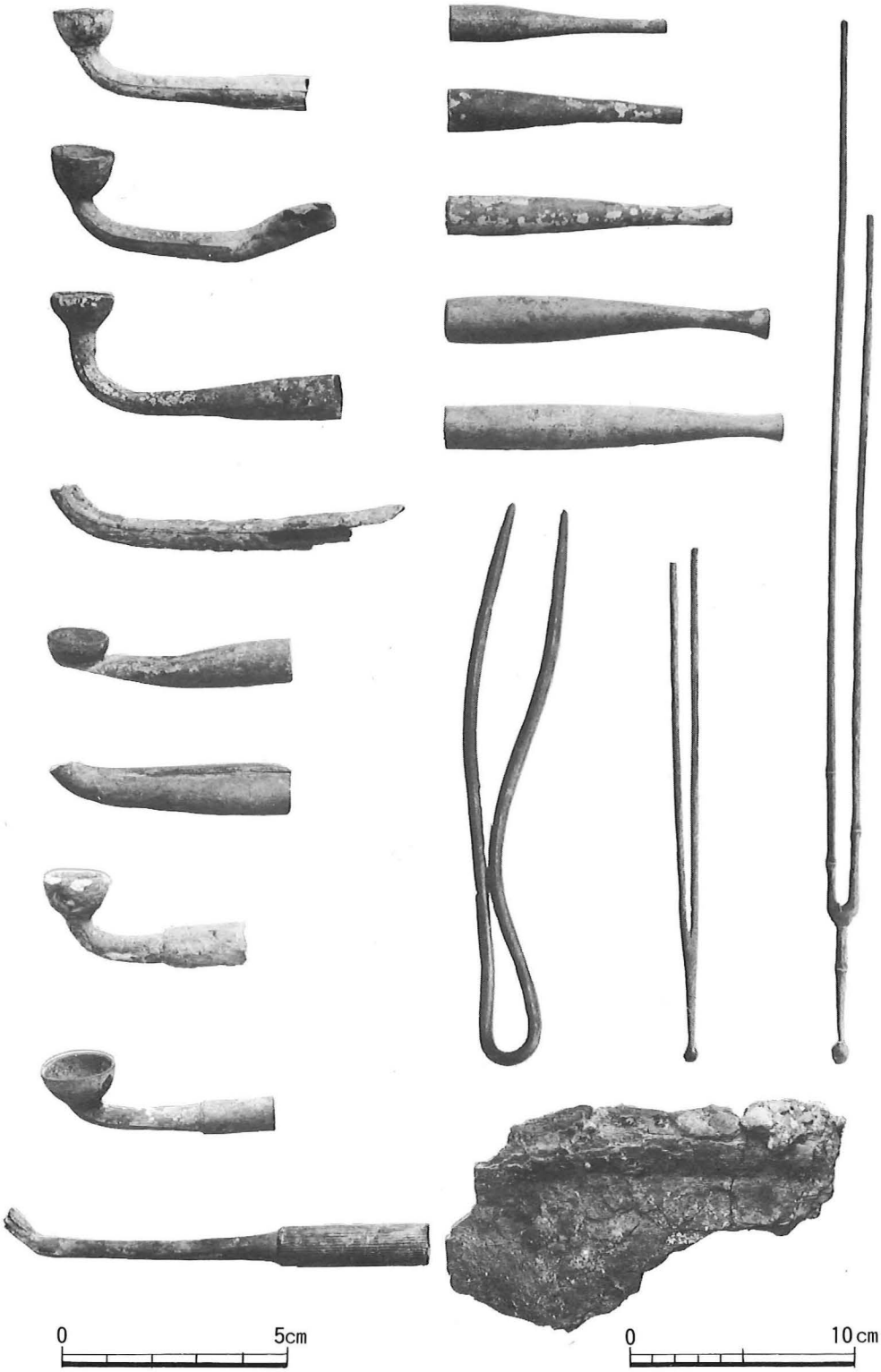
0　　10cm

ＰＬ21　陶器類

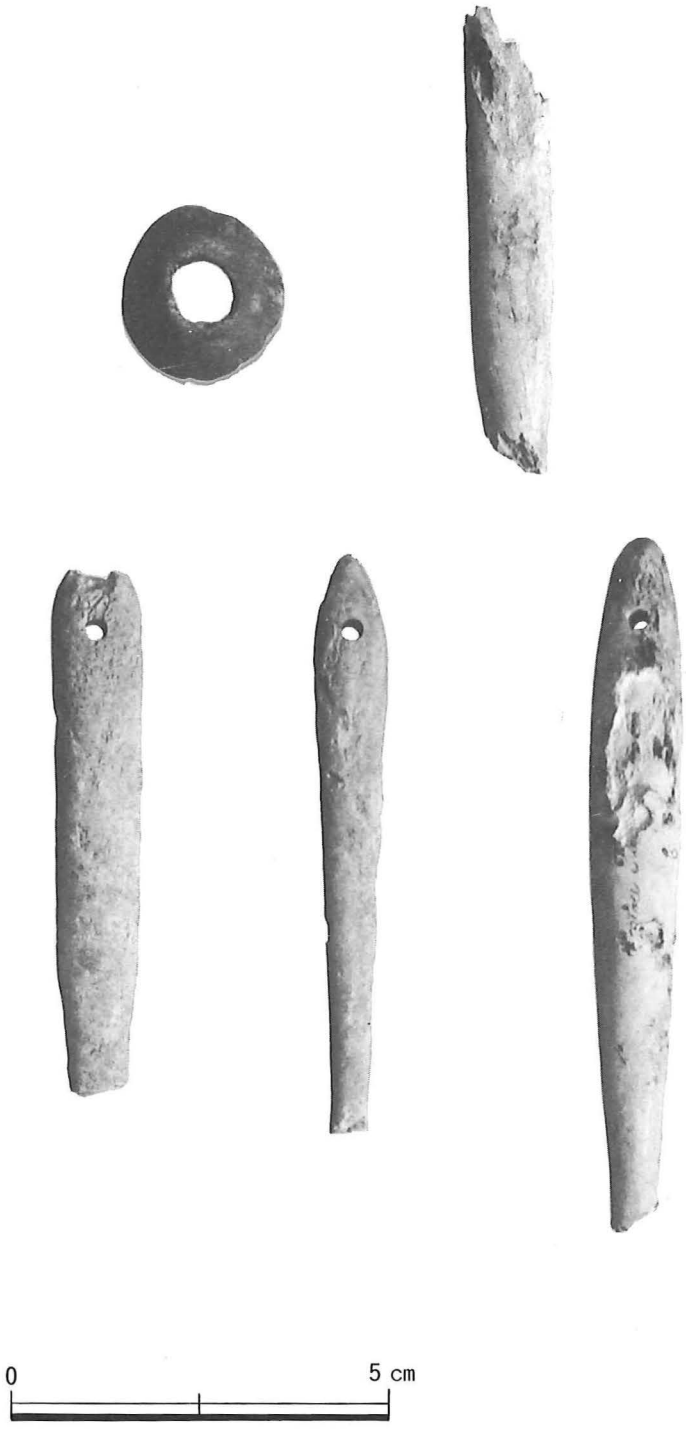
ＰＬ22　鉄滓(1)



ＰＬ23　鉄滓・鋳型(2)



ＰＬ24　金属製品類



ＰＬ25　骨製品

長崎県文化財調査報告書 第33集

金石城跡緊急発掘調査報告書

昭和52年 3 月31日

発行所　長崎市江戸町 2 －13
長崎県教育委員会

印刷所　長崎市出島町15－15
東 洋 印 刷 所